
子どもの世界

甲斐仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子どもの世界

【Nコード】

N3861M

【作者名】

甲斐仁

【あらすじ】

子どもだけの世界で生まれた。人はみな、子どものまま生きていく。成長をはじめた、俺の身体 大人の存在は、罪になる。

ブローグ

ヴィレンドは、逃げていた。

肩で息をしながら、命の樹を目指して全速力で走る。

辺りは暗く、何度も草に足をとられて転んだ。顔や手足など、素肌が見えているところは細かい擦り傷ができて、血がにじんでいた。

それでも、立ち止まるわけにはいかない。

もうすぐうしろまで、追手はせまっていた。

「ヴィレンド、いそげ！」

パルスが呼んだ。

みれば、命の樹の聖域に、少女とみまがう少年が立っている。パルスだ。

（もう少しだ。もう少しで、聖域にたどり着く！）

天に届く巨大な樹 命の樹と呼ばれる樹の根元は「聖域」と呼ばれていて、ヴィレンドたちの「親」でもある。

どうやって生まれるのか。どうやって消えていくのか。

すべてが謎のこの世界で、ヴィレンドたちは「子ども」の姿で生まれ、「子ども」の姿で消えて行く。

そう。この世界の住人はすべて、子どもだった。それが、この世のことわりなのだ。

「ヴィレンド！ はやく！」

聖域は、目の前だ。ヴィレンドは重くなっている足を必死にうごかして、聖域へ転がるようにして飛び込んだ。

ヴィレンドが聖域に足を踏み入れた瞬間、パルスが右手にもった杖をかかげた。

バリツという音がして、雷鳴が空にとどろく。

「きさま、神の子でありながらこの世のことわりを崩すつもりか！」

「ヴィレンドはこの世にあつてはならぬ存在だぞ！」

「お前の地位まで危うくなるということを、わかっておるのか！」

追手の子どもたちが、口ぐちに叫んでいる。

彼らはそれ以上近づこうとしなかった。どうやら、立っている場所と聖域との間に、見えない壁のようなものが存在するようだ。

「だから、僕はヴィレンドを異界へおくるんだよ」

「そのようなこと、法王は許可されておられぬ！」

「ならば、僕の地位をはく奪し、処刑するといい。友のためならば、この命惜しくなどない！」

一層激しい雷鳴がとどろき、追手は数歩うしろへさがった。

それ以上どうすることもできず、追手はただパルスを睨みつけていた。

ヴィレンドは追手がこないことを確認すると、重い足をうごかしてなんとか立ちあがり、パルスの元へ歩み寄った。

命の樹の根にもたれ、ずるずると座りこむ。

「パルス、お前の身が危なくなる。俺のことはもういい」
「よくなどないよ。ヴィレンド、君は僕のことを差別しなかっただろっ?」

肩で息をするヴィレンドに、パルスはほほ笑みかける。

パルスは、異端の力をもって生まれた、神の子と呼ばれる存在だった。

時折、命の樹から、人にあらざるものの力をもつ子どもが生まれる。その子どもは神の子と呼ばれ、いずれは法王につかえる身となることが決まっている。

しかし、同時にその力をおそれられ、友もできぬ孤独を背負うことになる。

パルスは生まれつき、雷をあやつり、自然と一体化する力をもっていた。

神の子のなかでも稀にみる巨大な力に、人々はみな、パルスを避けた。

「これをもっていつて。ただし、いいか、ヴィレンド。これは、一度しか使えないし、一度使うと取り消すことができない」

パルスは、金色の鍵をヴィレンドに手渡した。

細かな装飾が彫られていて、ルビーのような真っ赤な石がはめられている。

「いや、パルス。それより俺が処刑されれば、それでぜんぶうまくいくんだ。この鍵も、なにかは知らないが俺は」

「持っていて。早く、急いで。立って!」

「パルス!」

パルスはヴィレンドを立たせると、その手に鍵を押し付けた。
そのまま、命の樹の根に、力いっぱいヴィレンドの身体を押しつける。

「ヴィレンド。この鍵は、一度だけ願いをかなえることができるんだ。ただし、誰かを殺すこと、誰かを生き返らせることはできない」
「パルス、なにをするんだ。俺はもういいって言っているだろう？俺が逃げたら、お前が罪をとわれる！」

命の樹の根が、突然ぐにやりと曲がった。

辺りが淡い金色の光を発し出し、すぐそばで別の景色がみえる。
ヴィレンドは、瞬きをくりかえした。

「どうなってるんだ！」

「君を、異界へおくる。僕も、どの世界へ君がたどりつくかわからない。ヴィレンド、その鍵はきっと君の役に立つだろう」

「パルス！」

パルスの顔までもが、歪みだした。

パルスがそこにいるというのに、パルスに重なるように見たこともない風景が見える。

「だめだ、俺はいい。頼む、お前が罪をとわれるのは、俺はたえられない！」

「ヴィレンド。お前に会えてよかった」

「パルス、待て。おい、なんだこれは。おい、パルス！」

ヴィレンドを押しつけていたパルスの手が、消えた。見えていた命の樹と聖域がかき消され、別の景色が広がっていく。

「パルス！」

フツ、と歪んでいた空間が、もとに戻った。

けれど、そこはもう、ヴィレンドの知る世界ではなかった。

ブログ（後書き）

以前に書いたものですので、色々読みづらいところもあるかと思いますが。

自分の記録のために、ほとんど加筆せず投稿中。。。

申し訳ない><

すでに完結済みですので、最後まで投稿します。

付き合ってくださいの方、付き合ってくださいの方、ありがとうございます！

1、新たな生活

聖域と呼ばれる「命の樹の根」から、子どもが生まれる。

肌の色が違う。身長が違う。髪の毛の長さが違う。

皆、少しずつ違うところがあるが、子どもであることに変わりはない。

だが、中には「個性」ではすまされない、特徴ある子どもが生まれることがある。

それが「神の子」と呼ばれる異端の力をもつ子ども。

そして、もうひとり。

子どもの姿から、大人の姿へ変化する者だ。

ヴィレンドがまさに、その「成長する子ども」だった。

成長する己の身体に気づいたヴィレンドは、自分の身体をおそれた。いつか法王に知れば、処罰が下るからだ。

親友であるパルスだけが、その秘密を知っていたが、やがて秘密はもれて、ヴィレンドは追われた。

大人は、この世のことわりを壊す存在だ。みつければ、その場で厳しい処罰が決まっている。

だから、逃げた。生きたかったから、ヴィレンドは逃げた。

（だが、パルス。お前を犠牲にしてまで、生きたいとは思わないっ）

ヴィレンドは、地面に膝をついた。冷たい感触が、足につたわる。見覚えのない景色をぼうぜんと見つめていたが、ふと、空をみた。空は、さっきまでいた世界と同じで、とても広く、暗かった。ヴィレンドはふらつく足で立ちあがると、そばにあったベンチに座った。

ベンチは、ヴィレンドが生まれた世界のものと似ている。しかし、見える景色のすべてが、違った。

道は硬く、草一本生えていない。道の両側には、家だろうか。四角い建物がずらりと並んでいる。

なにより、夜なのに明るかった。道に一定間隔にならぶ、灯りのせいだろう。

ろうそくとは違う、変わった灯りだった。高いところにあるが、どうやって火を灯すのだろうか。

（そうだ、手渡された鍵）

ヴィレンドは、右手に握りしめた鍵を思い出した。

この鍵は、たった一度だけ願いを叶えると、パルスが言っていた。

にわかには信じられないことだが、パルスは神の子として法王に仕える身。頻繁に法殿にも出入りしていたのだから、もしかするとこの鍵は法王の所有物かもしれない。

ヴィレンドは、最後にみたパルスの姿を思い出して、拳をにぎりしめた。

鍵のでっぱりが手に食い込んでいたかったが、そんなことを気にする余裕はなかった。

命がけで、パルスはヴィレンドを逃がした。

ヴィレンドは生きたいと願ったが、誰かを犠牲にしてまで生きようは思わない。自分はそんな、大層な人間ではないのだから。

ヴィレンドは立ちあがると、左右に広がる道を歩き出した。

いきなり飛ばされた見知らぬ世界で、まるで一人きりになってしまったような錯覚をおぼえる。

この世界には、どんなひとが住んでいるのだろう。もしかすると、ヒトではないのかもしれない。

ふらつく足取りで歩いていると、小さな茂みのおくに、湖をみつけた。

建物ばかりの中に、まさか水が湧いているとは思わなかったヴィレンドはあわてて駆け寄り、喉をうるおす。

少し臭い水だが、逃げるときに走った身体は水を欲していた。

水に触れたしゅんかん、手に痛みが走って慌てて手をひっこめる。逃げる際に、細かな傷を負っていたことを忘れていた。

パシヤン、と水がはねた。

サカナがいるようだ。水面下に、うつすらと白い影がみえた。白と赤が混じっている影もある。

（変わった色のサカナだ。だが、綺麗だ）

ねずみ色のサカナしか見たことがないヴィレンドは、驚いて手のばした。

早くて捕まえないけれど、捕まえば食料になる。

痛みを感じて傷を思い出したように、サカナをみて空腹であることとを思い出したヴィレンドは、湖へと身体をのりだして、水面を手でまさぐった。

バシャバシャと水がはねるが、湖が深くてサカナまで手が届かない。

（なにか、道具がいるな）

「誰か、いるのかい？」

ふと、声がした。

どうやら、音をたてすぎたようだ。

ヴィレンドは、とっさに戦う構えをとって、声のほうへ目をこらす。少なくとも同じ言葉をしゃべる生き物がいることは確かだが、それが味方とはかぎらない。

茂みをかきわけで、小さな影が近づいてくる。

（子どもか……？）

大きさからして子どもかもしれない。

構えをとっていたヴィレンドは、警戒を緩めて手を下げた。しかし、現れたのはおぞましい姿の生き物だった。

その細く筋張った姿に、ヴィレンドはぎょっとして後ろへ下がった。

「あらあら、こんな夜中になにをしているの？」

「何者だ。お前は、ヒトか」

「ヒト？ どういう意味かしら。あなた、いくつ？」

その生き物は、おそらく人だと思われた。

だが、ヴィレンドの知っている人間ではない。少なくとも、いままでこんなおぞましい人間はみたことがなかった。

顔は皺だらけで垂れており、背中は曲がっていて杖をつかねば歩けないらしい。

杖をもつ手は筋張っていて、骨が浮き出ているようにみえた。

「あなた、うちへくる？ スープくらいなら、ごちそうするけれど」

「知らぬ者の家へは行けぬ。お前は、何者だ」

「かしこい子ね。あたしは、角の家に住んでるフーシャっていうおばあさんよ」

「フーシャ？ 名前か。それとも、そういう種族なのか」

「フーシャっていうのは、親からもらった名前ね」

フーシャは、きびすを返した。

「ついておいで。怪我の手当てもしないとね」

ヴィレンドは、ついて行くと言っていない。なのに、ついてくるのが当然だというように、フーシャは歩いて行く。

ヴィレンドは、考えた。

（あのフーシャというヒトから、この世界について聞き出すのかもしれない）

なにかあれば、逃げればいい。それに、最悪の場合、願いがかなうという鍵もある。

ヴィレンドは、ポケットの中にしまった鍵をにぎりしめて、その存在を確かめた。

「どうしたの？ おいで」

フーシャが立ち止まった。

「わかった、今いく」

ヴィレンドはうなづくと、フーシャのあとを追うように歩き出した。

やはり、四角い建物は家だったようだ。

別れ道の角にある、小さな建物。そこが、フーシャの家だった。

家の前には小さな門があり、なにか書いてあるようだが、ヴィレンドの知っている字ではなかった。短い文だというのに、読むことさえできない。

家のなかは、広がった。ヴィレンドが二十人は寝ころべる。

「ここが、家か。俺の知っている家とは、違う」

「そうかもしれないわね」

「ここが、特別なのか」

「どうかしら。他の家は、もっと豪華だと思うけれど」

「ここよりも？ 俺の家は、ベッドと机、あと椅子があるだけだ」

「あら、そうなの。台所はないの？」

「なんだ、ダイドコロというのは。……あれはなんだ」

変な音をたてている、白い四角い箱を指さした。

「冷蔵庫よ」

「あれは？」

「レンジよ」

「なにをするものだ」

「生活に必要なものかしらね。食べ物を保存したり、温めたりするの。……ねえ、あなたはどこからきたの？」

ヴィレンドは部屋をひと通り見回すと、椅子に座った。逃げる際についた傷が、しくしくと痛む。

「どこだっていい」

「別の世界から、来たんでしょう？」

ヴィレンドは、フーシヤを睨みつけた。

この世界のことわりは解らないが、そう簡単に「別の世界」という言葉がでてくるとは思えなかったからだ。

少なくともヴィレンドがいた世界の子どもたちは、パルスのように特別な地位にいない限り「異界」の存在は知られていなかった。

それとも、この世界では「異界」の存在は至極当然なことなのだろうか。

ヴィレンドの視線を受けて、フーシヤは壁際にある変な長椅子へ歩いて行った。その様子を注意深くみていたヴィレンドだったが、フーシヤが細長い棒を押した瞬間、驚いて立ちあがった。

なんと、何も無いところから突然、水が出てきたのだ。

「きさまは、神の子か！」

「あらやだ、そう見えた？」

「何も無いところから、水を出しただろう」

フーシャはほほ笑むと、取っ手のついた妙な形の器に水をいれた。その器を、いましがた水をだした長椅子の隣に、置く。

「じゃあ、これも驚くかしらね」

フーシャがつまみをつまむと、ボツという音がした。今度はなんと、何も無いところから火がでたではないか。

「やはり神の力を得ているのか。俺をどうするつもりだ」

「わたしはね、そんなたいそうな人じゃありませんよ。これはね、誰でもできるの。あなたの世界はどうか知らないけれど、ここでは普通なのよ」

フーシャは、杖をつきながら部屋の反対側へ移動した。棚から四角い木箱をとりだすと、それを抱えてヴィレンドの傍へきた。

警戒するヴィレンドに笑ってみせると、

「手当てをしないとねえ」

と言って、四角い木箱を開けた。

「さあ、手をだして」

「断る。フーシャ、お前は怪しい。その身体に、先ほどの言動。ただのヒトとは思えない」

ヴィレンドは、力いっぱいフーシャを睨みつけた。

そのまま護身用の小剣を取り出すと、戦つかまえをとる。

ヴィレンドとて、大人へ成長する身をもって生まれたが、長年にわたり戦士として鍛えてきた身。簡単に逃げられる、と思ったのが

間違いだった。

神の子となれば、逃げるのが容易いはずがない。もしかすると、配下の追手を出される可能性もある。

フーシャは向けられた剣を見て、そつと息をはいた。

「なにから、説明すればいいかしら。なにが、ききたい？ 答えるわ」

「その身体だ。俺は、お前のような身体のものを見たことがない」

「わたしはね、おばあさんだからよ」

「オバアサン？」

「そう。歳をね、とつたのよ」

ヴィarendは、ぎよつとした。

（歳をとる？ 歳をとるとは、つまり、成長するという意味と同じだ）

まじまじとフーシャをみつめ、力なく首をふる。

「まさか。成長すると、そうなるのか。……俺も？」

「ええ。ひとは皆、歳をとると皺しわになって、わたしみたいになるの」

「とても、醜い」

「そうかもしれないわ。でも、ここまで生きられたことを、わたしは感謝しているの。主人は若いうちに、捕えられてしまったから」

「シュジン？ 仕えていた主がいたのか」

「夫のことよ。二十五のときに、結婚したの」

「オット？ ケッコン？」

（どういう意味だ？ さっぱりわからない）

ヴィレンドは、言いようのない齒がゆさを感じた。

異界へ渡るとは、つまりそういうことなのだ。すべてが新しくなり、常識そのものが変わってしまう。今まで積み重ねてきたものが、ここではなんの役にも立たなくなる可能性もある。

フーシャは、目を細めてほほ笑んだ。

「あなたの世界とこの世界は、違うのね。あなたの世界は、どんな世界なの？」

ヴィレンドはまた、フーシャを睨みつけた。探られているのかもしれない。

それをみて、フーシャはうなづいた。

「そうね、言いたくなければいいわなくていいわ。だから、傷の手当てだけさせてちょうだい」

骨と皮だけの手が、差し出された。

（恐ろしい、魔物のような手だ）

自分も成長を重ねれば、この手のような手になるのだろうか。杖をついてやっと歩けるような、ひ弱な人間になど、なりたくない。剣を扱えぬどころか、走ることさえままならないではないか。

「ひどいことはしないわ。あなたの質問も、答えるから。ね？」

さあ、とさらに手をさしだすフーシャに、ヴィレンドはおそろおそろ剣をおさめると、手をだした。

フーシャはまた目をほそめて笑うと、手当をはじめた。

木箱から出された白い布は、包帯だろうか。見知らぬものばかりだが、手当をする道具だということは、ヴィレンドにもわかった。

「なぜ、俺が異界からきたとわかった」

「簡単よ。あなたがまだ、子どもだから」

「子どもが、珍しいのか」

「そうね。ここは、大人の国だから」

「大人の国？」

「そう。ここには、子どもはいないわ。みんな、生まれたときから大人の姿なのよ」

ヴィレンドは、考えた。

（つまり、自分のいた世界とは、違ったことわりをもつ異界ということだろうか）

子どもだけだったヴィレンドの世界とは反対の、大人だけの世界。

「驚かないのね」

「俺の世界に、大人はいなかった。反対の世界があっても、おかしくはない」

「そう、それでわたしを見て驚いたのね」

「お前はなぜ俺が子どもだとわかった。この世界に、子どもはいないのだろうか？」

フーシャが傷口に液体を垂らした。途端に、傷口に裂くような痛みが走った。

「がまんしてね。消毒をしているの」

「問題ない。それより、はやく答えろ」

「昔ね。まだわたしが若かったころ、会ったことがあるの。その子も、異界からきた子どもだったわ。あなたと同じね」

「……その子どもは、どこにいる」

フーシャの、視線がさがった。

かすかに浮かべていた微笑も消えて、その瞳にかなしげな色が宿る。

「その子は、今のあなたよりももう少し成長してたわ。でも、よく似てる。身体は子どもなのに、とても大人びていた。生まれて二年しか経ってないわたしよりも、ずっと大人なひとだったわ」

そこで、フーシャは一度言葉をきった。

「……どうした」

「主人だったの。わたしの、夫だったのよ。でも、連れていかれてしまった」

「連れていかれた？」

「この世界は、大人ではない人間を受け入れないの」

そう言っつて、フーシャは静かに涙をながした。

ヴィレンドは、そんなフーシャを見つめながら、彼女が今言った言葉を考える。

大事なものは、彼女が今いった「大人ではない人間を受け入れない」という言葉。

その言葉が本当ならば、この世界はヴィレンドにとって生活しにくい環境ということになる。

子どもの姿である自分は、この世界で暮らすどころか外を出歩く

ことさえできないということだ。

フーシャは、鼻をすすると涙をぬぐった。

「神の子、って呼ばれる人たちがいるの。科学じゃ説明できない、特別な力をもつひとよ。そのひとたちが、この世界をつくっているの」

「どういうことだ。神の子が、法王なのか」

「ホウオウ、というのは知らないけれど。神の子が、この世界のすべてを決めているの。神の子が、大人しか受け入れないと言ったからには、わたしたちはそれに従わなければならなかった」

「だが、お前は前に会った子どもを、オットにしたのだろう」

「そう。愛したの。彼を愛してしまったから、そばにいてほしかったのよ」

フーシャの目から、ぬぐったはずの涙がまた、あふれた。

皺だらけの顔がいつそう、皺だらけになる。

「だから、もう繰り返さないの。あなたは、わたしが守るわ。けれど、感謝とかそんなのしなくていい。これは、わたしの夫への罪滅ぼしなの。あのひとを守れなかった、わたしの」

「意味がわからない。俺は、オットになるつもりはない」

フーシャは細い目をみはった。かと思うと、なにがおかしいのか突然笑い出した。

「そうね。こんなおばあさんだものね」

フーシャは、ヴィレンドの手に包帯を巻き始めた。

「手当てが終わったら、少し休むといいわ。わたしのベッドを使つて」

「ベッド？」

ヴィレンドは、部屋をみた。見たかぎり、ベッドとおぼしきものは見当たらない。

「奥の部屋にあるから、あとで案内するわ。お腹も減ってるでしょうから、なにか食べ物も作らないと」

「……嬉しそうだな」

「ええ。この歳でまた、こんなにドキドキすることが起こるなんてわたしは幸せものね」

そう言つて、フーシャはいつそう嬉しそうに笑った。

ヴィレンドは、手当の終わった右手を見た。反対の腕を、というフーシャの言葉にしたがつて、もう一方の腕も差し出す。

パルスは、ヴィレンドがどの異界へいくかはわからないと言つていたが、もしかするとこの「大人の世界」のほかにも、異界があるのかもしれない。

けれど。どれだけこの世界が自分にあつていなくとも、もう来てしまった。

ここで自分は、生きて行かなければならない。命をかけてヴィレンドを逃がした、パルスのためにも。

（そのためには、協力者が必要だ）

ヴィレンドは、ちらりとフーシャを見た。このフーシャという大人は、ヴィレンドを守るといった。

本当か嘘かはわからない。だが、この世界のことわりについて知るまでは、この者のもとで学ぶべきかもしれない。

（危うくなれば、逃げればいい）

もしもフーシャがヴィレンドを神の子へ渡そうとしたら、そのときは鍵をつかおう。

例えそれで、この人間や、この世界が、どうなったとしても。

命の樹と呼ばれるそれは、国の中心にあるという。

そこから「大人」が生まれ、そして歳をとり、「死」がやってくる。

「死とはなんだ。いや、国とはなんだ」

「国はね、人々のあつまりなの」

そう言って、フーシャは地図をみせた。

ここ、とフーシャが指でつづいた先には、緑の線で囲われた場所があった。さらに細かく、赤や黄色で中が幾つかに区切られている。

「緑の線で囲っているのが、この世界すべてなの。中をそれぞれの色で区切っているのが、国」

「集落みたいなものか。この緑の線のそとには、なにがある？」

「海よ」

「ウミ？」

「全部、水ってこと。この世界の外は、海ばかりらしいわ。海は広くて綺麗で、塩の味がするらしいけれど、わたしは見たことがないの」

「ウミ、というのは、よくわからないが。だが、この国はこの地図に描かれているものがすべてなのか」

黄色の線で囲われた国の丁度中心に、見えるかみえないかほどの点がある。神殿というらしく、神の子がすまう神の城らしい。

フーシャによると、神殿はこの家とは比べ物にならない大きさだという。

（ならば、この国という集落は、とても巨大だ）

フーシャが使った水や火をだす力といい、この世界はヴィレンドの世界よりも、数段進んでいるようだ。

この世界へきて、まだ二日しか経っていない。

ヴィレンドは、フーシャからきくこの世界の事実に、おどろくばかりだった。

そう、ヴィレンドの得ている知識はすべて、フーシャから与えられている。

本当に彼女の話す言葉が真実なのかはわからないが、少なくともフーシャに敵意はみられない。そう、ヴィレンドは判断していた。

「ねえ、ヴィレンド。あなたの世界の住人は、死ぬことはないの？」
「さつきも言ったが、死の意味がわからない。意味のわからぬものを、答えることはできない」

「人は、死ぬのよ。身体が動かなくなつて、意識がなくなつて、心臓も止まってしまう。身体だけを残して、魂が神様のもとへ帰るの」
「なんだそれは。置いて行かれた肉体はどうなる？ 食べるのか」
「まさか、食べないわ。お墓をつくって埋めるわね」

ふむ、とヴィレンドは考えた。

軽く顔をあげて、机をはさんだ向こう側にいるフーシャから、窓辺へと視線を向けた。ガラスの向こうで、青い空を飛ぶ鳥がみえる。

こちらの世界にきてから、よく見る鳥だ。

「なるほど。旅立つことを、死というのか」

「旅立つってどういうの？　なんか、素敵ね」

「我ら子ども以外はみな、そのように肉体を残して動かなくなる。たとえば、ウサギ。それに、鳥だ」

獲物をつかまえ、それを食べるとき。ヴィレンドの世界では、「命が旅立つ」として、祈りをささげる。

それと同じなのだろうと、思った。残された肉体は、生きるものの血肉となり、生きる糧をあたえるのだ。

「だが、我ら子どもが旅立つことはない。我らは、ひっそりと消滅していく」

ヴィレンドは、視線をまた、フーシャに戻した。

フーシャは意味がわかっていないのだろう、軽く首をかしげてみせた。

「我らは命の樹から生まれる。そしていずれ、消えていくのだ。身体も残らぬ。残るのは、その者を知っている者たちの記憶だけだ」

何度か、消えて行くものたちをみたことが、あった。

なんの予兆もなく、それは突然やってくる。

「そうなの。なんか不思議ね。この世界の常識が、あなたの世界で

はまったく違うなんて」

そう言うと、フーシャは立ちあがった。
時計という機械をみれば、昼が近い。

「そろそろお昼ご飯の支度をするわ。手伝ってくれる?」
「わかった」

杖について歩いて行くフーシャの後ろ姿を見つめ、ヴィレンドは
そつと目を伏せる。

(これからどうするべきなのか)

この二日、ヴィレンドはフーシャの家からでたことがない。フー
シャは「外に出てみない?」とひんぱんに進めてくるが、ヴィレン
ドはそれを断っていた。

布をかぶれば大丈夫だとフーシャはいうが、子どもの身なりであ
る自分の存在が知れば、大事になりかねない。

(まだ、そのときではない。もう少しこの世の常識を知ってからだ)

「たまごを取ってくれる?」

「いくつだ」

「二個よ」

ヴィレンドは冷蔵庫から、たまごを取り出した。それを、棚にお
かれた器にいれてフーシャへ手渡す。

冷蔵庫は、食べ物を保管する機械だ。これもまた、ヴィレンドの
いた世界にはなかったものだ。

ヴィレンドは、パンの準備をしながら考える。

この世界でも、主食はパンだ。そして、ヴィレンドがいた世界と同じ言葉を使う。夜に眠り、昼間活動する。

切り分けたパンを皿に乗せ、机に置かれた新聞を退けた。

新聞という情報誌には、細かに字が書かれているが、それをヴィレンドは読むことができない。

（言葉は同じだが、表現する字は違う。それは、「子どもの世界」と「大人の世界」に住む人々が、独自の字をつくりあげたからではないだろうか）

つまり、もとは同じような世界だった可能性がある、ということだ。発展する方向や速度が、違うだけなのだろう。

そうなれば、文化の進み具合からみても、大人は子どもよりも優れているのだろう。

ならばなぜ、「子どもの世界」では、大人の存在がことわりをくずすと言われているのだろうか。

（といっても、すべて憶測でしかないが）

「ねえ、ヴィレンド。午後からは、字の勉強をしましょうか」

フーシャが、たまごをフライパンに割りながら言った。

「読み書きができたほうが、都合がいいでしょう？」

「頼む。この世界の文字は、わからない」

ヴィレンドはそつと息をはくと、考えを頭の中から追い出した。早く馴染まなければという思いばかりが、先走っていた。

昼食を食べ終わると、台所という大きな長椅子のような場所に、皿をおいた。

いつもフーシャは、ここで料理をする。どういう仕組みかわからないが、これは水や火をだす機械なのだという。

ヴィレンドは、自分に宛がわれた部屋へと戻った。今は使われていない、フーシャの「夫」の部屋だ。

椅子に座ると、背もたれに深くもたれかかった。

一人になると、安心する。とても疲れていた。緊張と焦りと、警戒。徐々に、フーシャに対して気を許しはじめた自分に気づくたびに、己に注意する。

（戻りたい、あの世界に。なんの変哲もない、日常に）

ここを強く持たねば、生きてはいけない。それはわかっている。わかっているが、ヴィレンドは帰りたいと思ってしまう。

（戻る世界も、ないというのに）

2、下市民

ヴィレンドは遠くにみえる大木を見つめ、目を細めた。

そのとき、すぐ近くに人がきた。目深にかぶったフードの裾をひっぱって、顔を隠す。

目の前にある銀色の柵は左右にどこまでもつながっており、その手前にはヴィレンド同様、多くの人々が同じ方向を見つめていた。

ヴィレンドは、そつときびすを返した。

少し離れたところにある電柱にもたれている、フーシャのもとへと歩み寄る。気づいたフーシャが、にっこりとほほ笑んだ。

「どうだった？ 見れた？」

「見れたが、随分と遠い。それに、思っていたよりも小さいな」

「あら、そうなの？」

ヴィレンドは、もう一度柵の向こう側をふり返った。

銀色の柵の向こうに、巨大な建物がみえる。神殿と呼ばれる神の子たちが住まう場所であり、この国の中心でもある。

その神殿の中央からは、巨大な大木がその身体を天へと突き出し、ていた。

根元は神殿の壁にさえぎられてみえないが、太い幹や生い茂る緑の葉は、遠目からでも十分みることができた。

「俺のいた世界の命の樹は、天に届くほど背が高かった。ここの樹

は、その半分以下だ」

「じゃあ、あなたの世界の樹のほうが、早くに生まれたのかしらね」

のんびりと言ったフーシャの言葉に、ヴィレンドは驚いて振り向いた。

顎に手を当て、ふむとうなづく。

「そうかもしれない。命の樹も成長するし、あちらの樹が先に生まれたということか」

ヴィレンドは、ポケットから手帳を取り出すとサラサラとメモを取った。

「さて、なにか買って戻りましょうか」

「ああ。気をつける、足元に段差がある」

「はいはい」

フーシャは、杖を突きながらゆっくりと歩き出す。

ここ一年ほど、彼女はあまり出歩かなくなった。料理や洗濯、掃除などの家事もすべて、ヴィレンドがしているほどだ。

ヴィレンドはフーシャの隣に立つと、空いている方の手を支えた。

「あらあら、ありがとう」

「ホテルに戻ったら、薬を飲んで少し休め」

フーシャは、ただ笑った。

ヴィレンドは彼女から視線を反らし、フードを深くかぶったまま、注意深く辺りを観察した。ここは観光地でもあり、人の数が多い。

はじめてフーシャ以外の人間を見たとき、そのおかしい服装に驚

いたものだ。そして同時に、フーシャの着ている衣類がとても簡素だということを知った。

こうして見る人々の服は、とても凝っている。様々な色を組み合わせたものがあれば、小物がついたものもあり、生地が少なく肌を露出させているものもある。

それはオシャレというものらしいが、フーシャはそれをしない。できないのだ。

「大丈夫か。もうすぐ、ホテルだ。おぶろつか？」
「大丈夫よ。歩けるわ」

また、フーシャは笑う。

ホテルの部屋に戻ると、ヴィレンドはフーシャを椅子に座らせ、薬を用意した。

「足は痛むか。腰は？」

「大丈夫」

「うそをつくな。ホットパックをつくる、横になってくれ」

ヴィレンドは、洗面台へ向かうと備え付けのタオルを手にとった。このホテルには、客用にタオルや歯ブラシまでもが、備え付けてある。客はそれを、好きに利用していいことになっているらしい。

ホテル　ヴィレンドがいた世界でいう、借り宿は、お金を払えば止まれる宿場である。

ヴィレンドは、ポットから熱湯をだして、それにタオルをひたした。ホットパックとは、湯たんぽかわりになる温めたタオルのことだ。

出来上がったホットパックをビニルで包み、フーシャの元へ戻った。

彼女は、ベッドに寝ころんだままゆったりとした寝息をたてており、起こすのも忍びない。

ヴィレンドは、ホットパックをフーシャの腰の下へと滑り込ませた。

（フーシャは、疲れている。とても、とても）

この世界にきて、「老い」というものを知った。そして、フーシャに「死期」というものが近づいているだろうことも、感じていた。

ヴィレンドは、子どもの姿から、がっしりとした大人の姿へと変貌しつつある。だが、フーシャの肉体は反対に衰え、小さくなっていく。

その変化を間近で見ていると、どうしても居た堪れない。

ヴィレンドは窓辺にある椅子に座り、今日書きためたメモを見返した。

この世界にきて、もう五年の月日が流れようとしていた。

この五年、ヴィレンドはこの世界のことわりを知るために、全力を尽くしてきた。そして、この世界の理を知らばしるほど、異界の成り立ちについて興味を持った。

命の樹とは、一体なんなのか。そして、子どもの世界や大人の世界によって、身体の発達や死のあり方が違うのは、なぜだろう。

もしかすると、「子どもから大人へなる間の人間だけの世界」というのもあるのかもしれない、とヴィレンドは考える。

「ん……痛」

フーシャが、苦しげに息を吐いた。
ヴィレンドはメモをしまうと、フーシャの元へ行って寝がえりを手伝った。背骨ごと背中が曲がったフーシャにとっては、寝がえりひとつ苦痛なのだ。

フーシャの寝息が穏やかになったのを確認して、ヴィレンドはまた窓辺の椅子へ戻った。

カーテン越しに外をみれば、神殿の一部が見える。
命の樹は反対方向なので見えないが、ここから確認できるだけでも「神殿」が巨大であることがわかった。

（神殿か。あの中に、神の子がいるんだ）

『首都にいきましょう』と、フーシャが言いだしたのは、一週間前。
なにを思い立ったのか、それは突然だった。

今のフーシャの身体で泊りがけの遠出は厳しい。もっと暖かくなって、身体が落ち着いてから行こう。そう言ったヴィレンドに、フーシャは首を横にふった。

「今行きたいのよ。あなたも、命の樹を見たがっていたでしょう？」
「首都までは、馬車を乗りついても三日はかかる。駄目だ、馬車の揺れは腰に悪い」

「あら、わたしの心配をしてくれるのね。大丈夫よ、大丈夫です」

頑固者のフーシャは、そう言っただけで譲らなかった。

これまでコツコツと溜めてきた貯蓄をはたいて、今回の首都への旅にでたが、やはりというか、フーシャの顔色は悪い。

なぜ、こんなに苦しんでまで首都へ来たかったのか、ヴィレンドにはわかりかねた。

（彼女が望むならば、叶えてやりたい）

そう思うが、もしフーシャが近い未来、この世から姿を消してしまったら、どうすればよいのだろう。

身体は大人になるし、ひと気の少ない「村」と呼ばれる集落でならば、暮らしていけないこともないだろう。

前にいた子どもだけの世界では、共に暮らす習慣がなく、みんながひとりで暮らしていた。ヴィレンドも、ずっとひとりで生活してきた。だから、ひとりでの暮らしは慣れている。

「……慣れとは、恐ろしい」

フーシャと暮らした五年は、とても楽しかった。ひとりでいるよりも、ずっとずっと楽しい日々だった。決して楽な生活ではなかったが、共に野菜を栽培し、料理をして、この世界のことについて語りあった。

ひとりよりも、ふたりでいる方がずっと楽しい。

だから、この世界の人々は「結婚」するのだろう。

フーシャが教えてくれた「愛」や「恋」はまだよくわからないが、それでも「結婚」することや、「夫婦」になる意味が少しだけ、わ

かった気がした。

＊

翌日また、命の樹をみるために、銀の柵の手前まで足を運んだ。フーシャがそれを、切望したからだ。だが、人の多い銀の柵近くまではいかず、今日も電柱にもたれた姿で、神殿をながめている。

「なにか、神殿にあるのか」

「神の子がいるわ」

フーシャはそう言っ、優しげに目をほそめた。その目は真つ直ぐに、神殿へ向いている。

（フーシャは、神の子に思い入れでもあるのだろうか）

ヴィレンドは、この世界にきてから神の子をみていない。神の子はなにか不祥事がおきた場合にしか、市民の前には現れないということから、見たいとも思わなかった。

「歳をとると、目が見えなくなってくるの。でもね、不思議なことに、遠くのはまだよくみえるのよ」

「神殿はみえるか」

「みえるわ。命の樹もみえる。あそこで、わたしは生まれたの。ほとんど、覚えていないけれど」

もうすぐ、春がくる。

神殿のふちを囲むように並び、桜の木があった。あと数カ月すれ

ば、満開の花びらをつけて人々の目を潤すのだろう。

「ヴィレンド、あなたはもう少ししたら、そのマント無しでも出歩けるようになるわ」

「そうだな」

「ひとりでも、生きていけるわ」

ヴィレンドは、フーシャをみた。

驚いた表情のヴィレンドをみて、フーシャはくすりと笑った。

「ごめんなさい。わたしの、わがままなの。あなたに会えて一緒に暮らすほど、あのひとを思い出してしまった」

「夫だった、者か」

「そう。あのひとはきつと、神殿にいるの。いまも捕えられたまま、この世に生きているって、そう、信じてる」

（ああ、そういうことか）

ヴィレンドは納得した。

フーシャは、夫であった男に会いにきたのだ。

それは恐らく。自らの死期が近いということを、悟ったからだろう。

きつとこれが、最後の旅になる。無理を押してここまできたのは、歩けるうちに愛する人に近づきたかったのだ。たとえ、その姿をみることができなくとも。

（愛、とはなんだろう）

ヴィレンドも、広大な神殿の建物を見つめた。そして、決して見

ることのできない、あの壁の向こう側を、想像した。

「わたしが死んでも、ねえ、ヴィレンド。あなたは、ずっと生きてね」

「俺は生きる」

「よかった」

出会ったところは、彼女がいつ裏切るとも思えないと考え、常に警戒していた。そんな自分を、ヴィレンドは恥じる。

「そろそろ行きましょうか。馬車に、乗り遅れてしまう」

フーシャが、腕につけた時計をみて言った。そうだな、とヴィレンドも頷いて、その腕を支えようとした。そのとき。

横を通り過ぎようと歩いてきた男の鞆が、フーシャとぶつかった。そのはずみで、フーシャがバランスを崩し、その場に転倒した。ヴィレンドは咄嗟に手を伸ばしたが、遅かったようだ。

「フーシャ！」

歳をとれば、骨も弱る。今のフーシャの身体では、腕をついただけで骨折をしかねない。

倒れ込んだまま動けないでいるフーシャを、慌てて抱き起こす。

しかし、その表情は苦痛に歪んでいる。

「どこか痛むか？ 腕か、足か」

「手首が、少し。あと、足、かしら。大丈夫、少し休めば治るわ」
人前ではしたないと思ったが、ヴィレンドはフーシャのスカート

を押し上げて足を見た。一目でわかるほど、真っ赤に腫れている。

(……駄目だ、折れている)

「手首は、どうだ？ 動くか」

「っ、痛い」

手首は腫れていない。しかし、痛みで満足に動かすことが出来ないようだ。

(まずい、な)

どこか、フーシャを見てもらえるところへ行かなければ。

病院という、怪我や病気を診てもらう施設が、この世界にはある。高額なお金が必要となるが、そんなことを考えてはいられない。

(病院は、どこだ。早くつれていかなければ、フーシャの命にかかわる！)

ヴィレンドは、フーシャを抱き抱えて立ち上がった。
そのとき。

「うわ、汚いのになぶかった!」

不意にきこえた言葉に、ヴィレンドは立ち止まった。みれば、フーシャになぶかった男が気持ちわるいものでも見るような目で、フーシャを見ている。

「ちょっと、やだあ。アンタ、きたない」

「俺だつてヤダつて。うへえ、この鞆もう使えねえ」

「っていうか、なんで神殿前に下市民がいるわけ？」

男と、その連れだろう女が話している。

ヴィレンドはその言葉をきいて、怒りにふるえた。

下市民というのは、フーシャのことだ。

この世界には階級というものがあり、人々はそれぞれその階級に振り分けられる。

一番偉いのが、神の子。そして、王族、貴族、平市民、下市民がある。ほとんどの者たちが平市民として生まれ、罪を犯したものが下市民に落される仕組みになっていた。

フーシャがおしゃれできないのも、そのためだ。

下市民は一目でわかるようにするため、国から支給されるチュニツクの着用が義務づけられている。

「いいから、大丈夫。ね、ヴィレンド」

フーシャが言った。その苦しそうな表情に、病院が先だと判断して、きびすを返す。

フーシャももとは、平市民だった。だが、異界からきた子どもを匿い、黙って夫としたことを罰せられ、下市民に落されたという。

生活が苦しいのも、そのせいだ。下市民は職にもなかなかつけず、まわりからは差別されて生きてゆかねばならない。

ガツ、とヴィレンドの頭になにかが当たった。
落ちたそれを見れば、石だった。

「うせろ、罪人」

誰かが言った。さっきの、男女じゃない。

ガツ。

また、ヴィレンドの頭になにかが当たった。あたった場所が、じんじんとにぶい痛みを発する。ヴィレンドは、悔しさから唇をかみしめた。

（ここで怒っては、ことが大事になってしまう）

悔しさと怒りを押し殺し、その場から立ち去ろうと再び歩き出す。そのとき。今度は本が飛んできて、ヴィレンドの頭をかすめた。

その拍子に、被っていたフードがずれた。

あわてて抑えようとしたが、両手はフーシヤを抱きあげていて塞がっている。あっという間に、ずれたフードはすくと背中に着いた。落ちた。

（しまった！）

しん、と周りが静かになった。

口ぐちに暴言をはいていた人々は、素顔が露わになったヴィレンドをまじまじと見つめている。

「なにあれ」

「ばけもの？」

「やだ、きもちわるい」

「もしかして、あれって、子どもなんじゃ」

徐々にざわめきが広がり、神殿をみていた観光客までもを巻き込

んで大きくなっていく。

「いけないわ。ヴィレンド、逃げて」

フーシャが言った。

「ああ、わかっている」

頷いたヴィレンドだったが、フーシャの顔色の悪いさにぎよつとした。

（まずい、早くフーシャの怪我を……）

焦りを押さえて一步步き出すと、周りから悲鳴があがった。

「子どもがいる！」

「捕まえてくれ、はやく！」

あつという間に、蜂の巣をつついたような騒ぎだ。その騒ぎの乗じるように、ヴィレンドは人込みに飛び込んだ。

だが、顔が見えてしまっていることと、フーシャを抱き抱えていることもあり、とても目立つ。

逃げまどう人々は、ヴィレンドをみると叫びをあげ、「子どもがいる！」と場所を示した。

逃げる方向を考えるため、ヴィレンドは一度立ち止まった。しかし、こちらへ向かって走ってくるねずみ色の制服を着た男たちを見て、あわてて反対方向へ走る。

「まずい。警備兵だ」

「ヴィレンド、わたしをおいて逃げて。目立つし、邪魔になるもの」
「駄目だ、置いてなどいけない」

一度罪をおかした下市民が再び罪を犯せば、厳しい処罰がまっている。

（どうすればいいのか）

ヴィレンドは悩んだ。フーシャは今、怪我をしている。高齢での怪我は命の危険につながり、すぐにでも医者へみせたい。

だが、今の自分にはそれができない。

かつては、大人の姿に変わっていく我が身が恐ろしくて仕方がなかったが、今は子どもの身である自分が悔しくてたまらない。

たくさんものをくれたフーシャに、自分はなにもできない。

前からも、警備兵がきた。神殿前ということもあり、警備の対応が早い。さらに方向を変えて逃げるが、すぐに足を止める。

（駄目だ、完全にはさまれた！）

そう思った瞬間、とつぜん足に力が入らなくなった。

ヴィレンドはその場で膝をついた。みれば、足首の上あたりから、真っ赤な液体が服をぬらしている。血だ。

「殺すな、捕まえろ」

男の声がした。

顔をあげると、ねずみ色の服をきた男たちが一定の間隔をあけて、

ヴィレンドたちのまわりと囲んでいた。平民たちは避難したのか、あたりにはほとんどいない。

広い神殿前にいるのは、ヴィレンドたちと警備兵だけとなった。

（せめて、フーシャだけでも逃がすことができれば）

ねずみ色の制服の上に、紺色の上着をはおった男がひとり、近づいてきた。

右手には銃　この世界の武器だ　をもっており、ヴィレンドへ向けられている。あの銃という武器は、とても強力だ。

本でしかみたことがないが、人をあつという間に殺してしまうほどの威力だという。

突然足に走った痛みは、あれで撃たれたからかもしれない。

銃をヴィレンドに向けたまま、男はすぐ近くまできた。

「お前は、子どもか」

「ちがう」

「その老婆は、知り合いか」

「ちがう」

きつぱりと答えたヴィレンドに、男はうすく笑った。

「こいつらを、捕えろ」

男の言葉と同時に、周りを囲っていた警備兵たちがヴィレンドを取り押さえた。警備兵のひとりが乱暴にフーシャを奪い取り、その肩にかつく。

「やめろっ、怪我をしてるんだぞ！」

怒鳴った瞬間、頭ににぶい痛みが走った。
視界がぼやけだし、強烈な睡魔がきたように瞼が重くなった。

目をとじる寸前。

最後に、フーシャのほほえむ顔を見たような気がした。

3、イノチ

（痛い、なんだ！）

足に走った激痛で、目が覚めた。

誰かが足を締め付けている。とつさにそれを蹴りつけて、ヴィレンドは上半身を起こした。手に硬いものが触れて、石畳みの上で眠っていたのだと知る。

「痛たたた、突然蹴るやつがあるか。腰に響いたらどうするんだ、まったく」

辺りは薄暗かった。わずかに電球からもれた光が、目の前の人物を照らしているが、よく見えない。

わかったのは、ここが牢屋の中であることと、誰かが一緒にいることだった。

そしてそれがフーシャではないということも、相手の低い声でわかった。

「何者だ、男」

「手当てしてやったんだぞ、感謝くらいしろよなあ」

男が、ヴィレンドの足を指さした。血が流れていた方の足だ。今は汚いボロ布が巻かれ、血は止まっている。

それを認めて、ヴィレンドは素直にあやまった。

「そうか、すまない。……貴殿は、だれだ」

「自分から名乗るもんじゃねえのか。まあ、いい。俺は、ボックス」

ボックス、と名乗った男は、ゆっくりと近づいてきた。咄嗟に構えて、懷に忍ばせている護身用の剣をとりだす。どうやら、剣は取りあげられなかったらしい。

男が近くまできたとき、はじめてのその顔が見えた。ぼさぼさの白髪に、伸び放題の白いヒゲ。そして、垂れ下った皺だらけの肌。

（老人か？　しかし、随分と元気に見える）

かなりのご老体だということは一目でわかったが、フーシャのように背は曲がっておらず、その目は生氣に満ちている。

「お前の名前は？」

「ヴィレンドという」

ヴィレンドが答えると、男はふむと頷いた。

「ヴィレンドか。懐かしい名前だなあ」

「懐かしい？」

「俺がもっていた世界の友人に、そんな名前のヤツがいたんだ」

そう言っつて、男はすぐ目の前に座った。

「お前も、子どもの世界からきたのか」

お前も、という言葉に、ヴィレンドは目を見開いた。

（つまり、この男もヴィレンドと同じように、子どもだけの世界からきた、と言うのか）

「はっは、これはいい。まさか、同じ世界からきた者がいるなんてなあ！」

「貴殿も？　ほんとうに？」

「そうだ。ああ、なっつかしいなあ！　あっちは相変わらず、法王がしきつとるのか」

ボックスは侮蔑を露わに吐き捨てると、ヴィレンドに筒を差し出した。

とつさに受け取るものの、それを持ったままどうすることもできずに固まる。

（なんだ、これは）

ヴィレンドの考えがわかったのか、ボックスはつけたすように言った。

「水だ、飲め。ここは牢屋だ、強がっててもしゃーないだろ。仲良くやろうやあ」

ははは、と豪快に笑う男を、ヴィレンドはまじまじと見つめた。歳だというのに、その動作はとても若々しい。それはヴィレンドにとって意外だった。

フーシヤは勿論、フーシヤ以外に見た老人はみな、身体の機能はおとろえ、弱弱しい印象があった。その分知識が豊富であり、その知識と引き換えに、身体が弱っていく。

それが老いというものだと認識していたが、どうやら違うようだ。

「ここは、どこだ」

「どこにみえる？」

「牢屋だ。おそらく、地下にある」

「そうそう。よくわかったなあ。ここは、罪人が捕まっとる牢獄だな」

廊下にも部屋にも、窓がない。それが地下だと思った理由だった。灯りとしての小さな裸電球があるだけで、それも廊下にひとつぶら下がっているだけだ。

「連れがいた。どこにいるかわかるか」

「そいつも、子どもの世界からきたのか？」

「いや。こちらの住人で、下市民だった」

「あー、だったらもう、生きちゃいねえだろう」

あっけらかんと言いつつ放った男を、力いっぱい睨みつけた。そんなヴィレンドに臆しもせず、ボックスは軽く肩をすくめてみせた。

「下市民が罪を犯せば、その場で酷い拷問がまってる」

「拷問だと？ ばかな、フーシャはもうかなりの歳だぞ！」

ヴィレンドは立ち上がろうとしたが、右足に激痛が走り、つまづくように転んだ。

（撃たれたところか、くそっ！）

「お前の足じゃ、動けんだろ。それに、こっからは出られんし」

「フーシャを助けないと。借りがある」

「律義な男だなあ、君は」

牢をしきる鉄格子の傍まで這っていき、出られないかと手で揺すってみる。鉄格子はびくとも動かず、抜け出せる隙間もない。

「ここに入ったが最後、一生出られんさ。それより、話をしようじゃないか。人と話すのは久しぶりだ」

「話をしたら、俺をここから出してくれるのか」

「俺に言われてもなあ」

ぼりぼりと頭をかいで、ボックスは近くまできた。ヴィレンドと同じように鉄格子ごしに外をのぞくと、軽く首をふった。

「ほら、さえぎられて出ることすらできん。むこうは自由。こっちは囚人だ」

ヴィレンドはそれには答えず、繰り返して鉄格子を揺らした。

ものはずみで外れるかもしれないと、繰り返して揺らす。だが、びくとも動かない。しばらくして諦め、別の脱出方法を考えた。

床下を掘って逃げようか。いや、道具もなしに不可能だ。ならば誰かがくるときを待ち、その者を倒して逃げるか。

「おい、物騒なこと考えんなよ。無理だから」

「そんなことわからんだろう」

ヴィレンドは必死に頭を回転させた。

だが、殴られた頭の痛みと足の痛みのせいか、うまく考えることができない。気がついたらぼうつとしていて、身体もだるい。

「おい、君。ヴィレンド！ あーあ、そんな足で動くからだろ。大人しくしている、きこえているか？」

遠くで、誰かの声がした。早くここから出なければ、そう思うのに身体がうまく動かない。重くて、まるで水の中に浸かっているようだ。

（フーシャは、どこにいるのだろう）

この世界にきて、フーシャだけが頼りだった。異界からきたことを承知のうえで匿い、たくさんのことを教えてくれた。

（フーシャを探さなければ。早く、しないとっ）

重い身体を動かすが、沼に飲み込まれていくように身体が地面に沈んでいく。

辺りは真っ暗で何も見えず、自分自身の姿すら見ることがかなわない。自分がどこにいるのかわからなかった。

「ヴィレンド」

誰かが呼んでいる。

フーシャだろうか。それとも、パルスか。

「おい、起きろっつーの。おお、目が覚めたか」

「……ボックス？」

「おー。意識はしっかりしてるようだなあ。熱はまだ下がらんが、気がついたんなら大丈夫だろ」

熱を、出していたようだ。しかも、気を失っていたらしい。

額に手をあてると、濡れた布が置かれていた。黄ばんでいて汚い布だが、この男の善意だろうと思うとふり払うこともできない。

「嫌なら使わんでいい。しばらく寝とけ、まったく」

「俺は熱を出していたんだな。どれくらいの時間がすぎた？」

「一晩ほどだ。食事が届いてるぞ」

そう言っ、ボックスは器と一欠けらのパンを差し出した。器の中には見るからに薄いスープが入っている。

食べたくなかった。それよりも、早くフーシヤを助けにいかねれば。

「食べたなくても、食べる。脱走するなら、尚更だろうが。口に押し込むぞ、いいか？」

「いいわけがない。……やめろ、痛い」

口元に押し付けられたパンを手で押し返して、ヴィレンドは上半身を起こした。かすかに動いた右足が、じくじくと痛む。化膿しているのかもしれない。

「やっぱりなあ、衛生的に悪いからな。言っておくが、俺はしっかり手当てしたんだぞ？」

「わかってる」

「そう落ち込むな。機会があれば、俺が逃がしてやるって」

「できもせぬくせに」

「言っただな！ まったく、お前は失礼だな。俺はお前よりもずっとすごいんだぞ」

そう言っ、ボックスはごそごそとズボンを脱ぎ出した。それを見て、ヴィレンドは激しく顔をしかめる。

「用を足すなら、向こうだろう」

「ばっか！ ちがう。これだ、みる」

そう言っ、ボックスはズボンの内側から四角い板のようなもの

を取り出した。大人の手のひらほどの大きさで、金色をしている。厚さは小指の爪の半分ほどで、とても薄い。

「これはなあ、子どもの世界からこっちにくるときに、俺がもってきたものだ」

「盗人が、変態め」

「お前は口が悪いな。言っておくが、俺は変態じゃないぞ、盗人は当たらずしも遠からずだが」

そういうと、ボックスはその薄い金の板を、指先ではじいた。

「これは、子どもだけの世界にあった、宝のひとつだ。俺がまだ、神の子として法殿につかえてたときに、かっぱらってきた」

「宝？」

ヴィレンドは、ボックスがもつ金の板をみた。そういえば、パルスから貰った鍵もこんな色をしていた。

ふと、ヴィレンドは考えた。

そうだ、鍵がある。鍵をつかえば、フーシャを助けることができるんじゃないだろうか。

パルスは、生死にかかわる願いはかなえられないと言っていた。そして、叶えられる願いはひとつだけだとも、言っていた。

ならば、一刻もはやくフーシャの無事を確認してから、何を願うべきなのかを検討する必要がある。

（まずは、ここから出られないことには、はじまらない）

「それを使つて、ここから出られるのか？ ……さて、なんと行つた？ 貴殿は、神の子なのか？」

ヴィレンドは、ボックスの顔をみつめた。

（神の子？ この、ボサボサ頭の男が？）

神の子という存在は希少で、子どもの世界でもまれにしか生まれてこなかった。

その「子どもの世界の神の子」と、異界で会うなどということがあるのだろうか。

「ああ、そんなときもあった。だが、やめたんだ。あの世界を知れば知るほど、うんざりしてたから」

ボックスは、少しばかり肩をすくめてみせた。

（栄えある神の子の地位にいて、気に入らなかったのか）

ヴィレンドは、かすかに眉をひそめた。

「……どうということだ」

「おかしいとは思わなかったか？ みなが子どもの姿で生まれ、知らずのうちに消えていく。だが、法王だけはずっと、あの世界に君臨しつづけていた。まるで、神のように」

「それが、法王ではないのか。法王は消えぬ、絶対的な存在だろう。だからこそ、法王であれるのだ」

「不老不死が、絶対的な存在？ それは自然の摂理に反しているんじゃないのか。それにな、あの法王がつくる子どもだけの世界ってやつは、どうも不自然すぎる」

「意味がわからない。あの世界にはあの世界のことわりがあるのだろう」

「そもそも、ことわりってなんだ？ 誰が決めた？」

「それは、世界が成り立ったときからの決まりでは？ いや、待て。どうということだ。ことわりとはなにか、俺はよく知らない。たしかに、誰が決めたのかわからないが、ことわりが存在するのは皆が知っていることだ」

「俺は、あの世界をおかしいと思った。最初は思わなかったが、身体が大人になるにつれ疑問を抱いた。……なあ、お前も大人になったからあの世界を追われたんじゃないのか？」

ボックスは、一度言葉をきった。しん、と牢屋に静寂が落ちる。

「つまりなあ。大人の存在はあの世界のことわりをみだす、って言うけど。それって、大人になったらあの世界に疑問をもちはじめ者が出てくるから、法王にとって都合が悪くなるってことだろう」

煩わしいものでもみるように、ボックスは金の板をみた。それを手の中であそぶように転がすと、とつぜんにつこりと笑った。

「ま、それはそれだ。こつからの脱出方法なんだが、こいつを使おうと思う」

ヴィレンドは明らかに話しを変えようするボックスに気づいたが、素直に頷いた。その話しも興味あるものだが、今はそれどころではない。

「それをどうする？」

「言っただろ。俺は、神の子だ。いつかここから出るために、神の子だということを隠してきたんだ、ずっとな」

ボックスは金の板をヴィレンドへ向けた。

板の端をツンツンと擦るように突くと、淡い金色の光を発しだす。パルスがヴィレンドを、この世界におくったときと同じ色の光だ。ぎよっとして、ヴィレンドはボックスに掴みかかった。

「まて、この光は。まさか、異界へいくのか！」

「ちがーう。俺にそんな力はない」

薄暗い牢屋が、一瞬のうちに淡い金色の光で包まれた。目を開いているのに、前がまっ白に見えてしまうほど強烈な光りのなかで、なにかがヴィレンドの肩を掴んだ。

「おい、足大丈夫か。お前が歩けねえと助けるどころじゃないしなあ」

「問題ない。それより、何をした。何も見えない」
「もうすぐ見える」

ボックスの言った通り、淡く包まれた光りは色を失っていき、再び薄暗い部屋へと戻る。

一瞬、もといた牢屋と同じ場所かと思ったが、鉄格子が見当たらない。先ほどの部屋よりも数段明るく、今にも消えそうな電灯が頭上で点滅していた。
どうやら違う場所に移動したらしい。

「ここはどこだ？」
「フーシャの近くだな。ここのとっかに、フーシャがいるはずなんだけど」

フーシャの家にあった、リビングと同じくらいの大きさの部屋だ。そのなかを、点滅を繰り返す電灯の明かりだけを頼りに、見回した。積み重ねられたダンボール箱に、部屋の中に一定間隔で置かれた棚が数個。そのうえに、人がひとり入れるほどの木箱が綺麗に陳列されている。何かの機械だろう、鉄の塊が無造作にそこに置かれていた。なにかの倉庫のようだ。

（本当に、こんなところにフーシャがいるのか？）

ヴィレンドは、辺りを見た。

しかし、綺麗に列をなす棚と、その上に並んだ木箱が部屋の大半をしめていて、人の姿などどこにもない。

「いない。ここではないのだろう」

「いや、ここだ。間違いない。俺がフーシャの場所を間違えるはずがない」

ボックスは、ダンボール箱をひっくり返しはじめた。荷物をどけ、僅かな隙間までも覗きこんで探し出す。

「ボックス、フーシャはねずみではない。そんなところ、いるはずがない」

「なあ、ヴィレンド。俺はいつでも牢屋から出れた。でも、出なかったんだ。なんでかわかるか？」

すべてのダンボール箱を開け終えたボックスは、今度は木箱に手をかけた。ごと、と大きな蓋をはずして、中をのぞきこんでいく。

「俺が逃げれば、フーシャが罪を問われるからだ。だから俺は、逃げなかった。あいつが生きていてくれたら、それだけでよかったんだ」

「ボックスは、フーシャと知り合いなのか」

「俺の嫁だ。こっちへきて、知り合った」

機械をながめていたヴィレンドは、驚いて振り向いた。ボックスの大きな背中が見えたが、その顔は見えない。

「ボックスが、フーシャの夫だったのか。異界からきた子どもを夫

にしたと、聞いたことがある」

「そりゃあ、俺だ。フーシャはいいやつだった。いいやつ、すぎた」

次々に木箱のふたを開いていたボックスの手が、不意に止まった。

「……手遅れだったか」

「ボックス？」

「お前は、くるな。もう行こう」

ボックスは、開いたばかりの木箱のふたをしめた。

ダンボールや木箱のふたを開いてはそのまま放りだしていたボックスが、その木箱のふただけ閉めた違和感に、ヴィレンドはすぐに気がついた。

ちょうど、人が入れるほどの大きさの、箱だ。

「ボックス？ その箱は、なんだ。なにが手遅れなんだ」

「ヴィレンド。ここにいても仕方がない。フーシャは、俺たちを助けた。俺たちが生きねえと、フーシャに申し訳がたたん」

「あの箱はなんだときいてる！」

ヴィレンドはボックスを押しつけて、木箱の前に立った。

その木箱に手をかけようとしたところで、ボックスに腕を掴まれる。

「俺たちが逃げたことはもう、知られてるだろう。早く逃げねえと手遅れになる」

「フーシャは、どこだ」

「いいかヴィレンド。この世界の住人は、死ぬんだ。それが自然の摂理ってやつなんだよ」

ボックスに捕まれた腕をふりはらい、強引に木箱を開けた。ふたはとても重く、両手で抱えるようにして開いた。

中には、やはりというか、予想通り。フーシャがいた。少しばかり顔色の悪いけれど、変わらず姿でそこにあった。

「……眠っている」

「ちがう、もう動かない」

「手当てをした方がいい。フーシャは手首と足に怪我を」
「ヴィレンド！」

ボックスがヴィレンドの肩をゆすった。静かな部屋にボックスの怒鳴り声が反響する。

「現実を、見る。もう手遅れだ。今はここを出ることを優先的に考える」

ボックスが、強引にヴィレンドの腕をひっぱった。ごとんと音をたてて、ヴィレンドが支えていた木箱のふたが落ちる。

「俺の力じゃ、移動ができねえ。当てにすんなよ」

「フーシャを、連れて行かないのか」

ヴィレンドはかすれる声でつぶやいた。ボックスは部屋のドアから顔をのぞかせて、警備兵がいないか確認すると、無表情でふりむいた。

「連れてなどいかない。邪魔になる」

邪魔、という言葉に、ヴィレンドは頭を殴られたようなショックをつけた。言い返そうと口を開くが、すぐに開いた口を閉じる。

（ボックスの言葉は、間違いじゃない。今は、ここを出ることを優先的に考えるべきだ）

フーシャは、なぜ下市民になった？　なぜ、こんな目にあつた？　ボックスとヴィレンドを助けたためだ。ならばせめて自分たちが助からねば、フーシャがむくわれなのではないか。

「気持ちわかるが、今は逃げようじゃねえか。話しは、それからだ」

ドアを出たとき、暗い廊下の奥から複数の足音が近づいてきた。ボックスは軽い舌うちをして、金の板をとりだした。

「それを使うのか」

「俺に次元を超える力はない。フーシャの元へこれたのは、この世界で知り合ったことがあるからだ。この世界に、俺にはほかに知り合いがいねえ。だが、頑張ればなんとかお前ひとりくらい、どっかに飛ばせるかもしれんだろ」

「次元を超える力とはなんだ。どうすれば、貴殿も一緒にいける？」

ヴィレンドの言葉に、ボックスはきょとんとしたように目をみはった。かと思うと、次の瞬間、声をあげて笑った。

「お前、俺を心配してくれてんの？　いいやつだなあ、お前は。人を疑うことを知らんのか」

「そういうわけではない。だが、大恩あるフーシャが愛したという貴殿を見殺しになどできぬ」

「残念だが、次元を超える力つーのは、生まれ持った力と比例してるんだ。異界へ生きた人間をおくるなんて、それこそ最上級の神の子くらいしかできねえよ。まあ、扉の鍵があれば話しは別だが」

鍵、という言葉に、ヴィレンドは我に返ったようにポケットをさぐった。

（そうだ、鍵！）

冷たく硬いかたまりが、指先に触れた。そのかたまりを引っ張り出すと、それは紛れもなく金の鍵だ。

フーシャのために使おうと思っていたが、それが叶わなくなった今、使う道はひとつだった。

「おい、お前。その鍵はまさか時空の扉の鍵か」

「知らんが、パルスという友人がくれた」

「見せてくれ」

ボックスが手を伸ばしてきた。その手に金の鍵を乗せてやると、反対の手で軽く頭を小突かれる。

「お前は！ 相手を警戒しろと言っただろ。俺がこれ持って逃げたらどうすんだ！」

「御老体には負けぬ」

「……あっそう」

そうこうしている間にも大勢の足音は近づいていた。見つかるのも、時間の問題だ。

「どうするんだ、その鍵を使うのか」

「おうよ。この鍵はな、時空の扉の鍵つつつて、時空の扉を唯一開くことができるしろものだ。実は俺も、この鍵を使って時空の扉をくぐってきたんだ」

「その扉というのは、どこにある？」

「ここにある」

ボックスは金の板をみせた。かと思うと、その側面に突然鍵を差し込んだ。穴などなかったように見えたが、もしかすると隙間があったのかもしれない。

ボックスは、突っ込んだ鍵をぐるりと回して見せた。

そのしゅんかん、金の板はまるで扉のように、中央から手前に開いた。

「……小さい」

「頑張ったら入れるだろ？ 足突っ込んでみたらどうよ」

「無理だろう。馬鹿じゃないのか」

「うっせ！ これは、別に入る必要はないんだよ」

ボックスが、金の板に差し込んだ鍵を引き抜いた。それとほぼ同時に、開いた小さな扉の内側から溢れんばかりの淡い光があたりに差し込み、ヴェイランドはボックスを見た。

「異界にいくのか」

「たぶんな。どこにつくかは、わからんけど」

ボックスに重なって、別の世界が見えた。前に一度、この現象を見たことがある。

まったく異なる、見たこともない世界が同時に目の前に広がるのだ。

そのとき、廊下の向こうにねずみ色の服をきた男たちの姿がみえた。なにかを叫んでいるが、皆同時にしゃべるものだから、よく聞き取れない。

「ほら、なくすなよ」

ボックスが、鍵を押しつけるように手渡してきた。

「その鍵、しっかり握りしめとけよ。俺、前るときその場に落してちまってさ」

「貴殿は、しっかりものだが抜けている」

「ははは、それ矛盾しすぎ！」

薄暗い廊下が、消えていく。一度だけ、後ろを振り返った。すぐ後ろに、霊安室、と書かれた部屋があつた。

ドアの向こう側には、フーシャが永遠の眠りにについているはずだ。ぐにやりと歪んだ目の前の風景は、重なり合った別の景色に紛れてきえていく。

戸惑う警備兵の姿も、霊安室の扉も見えなくなっていくなか、すぐ近くにいるボックスだけがはっきりと見えた。

やがて、霧がはれるように辺りの景色がくっきりとしてくる。同時に眩しい陽の光が顔に差し込み、ヴィレンドは腕をにかけて顔をおおった。

「森かあ。移動成功つてとこだな」

ボックスのひょうひょうとした声に、ヴィレンドは目を細めて辺りをみた。

そこは、麗しいほどの緑が生い茂る、森のなかだった。少し離れたところに湖があり、水面で直射日光が反射して光ってみえた。水面から、数羽の鳥がとびたった。大きな、白く美しい鳥だ。

「ここは、子どもの世界か？ とても似ている」

「さあな。決めつけることはできんが、懐かしいもんがあるなあ」

ヴィレンドは湖の傍へと寄ると、右手でその水を掬いあげた。透明感のある、綺麗な水だ。

「ヴィレンド、足をだせ。手当てしてやるよ」

「ああ。すまない、頼む」

「あやまん。こういうときは、ありがとって言うもんだ」

ボックスは笑うと、ヴィレンドの足を手当てしはじめた。その姿がフーシャと重なり、目がしらが熱くなるのを感じた。

大人の世界に移動してきたとき、フーシャも手当てをしてくれた。あのときは足ではなく手だったが、思い出される情景に、どうしようもない懐かしさと愛しさを感じた。

「どした、逃げきれて安心したのか？」

「……人は、死ぬのだな」

つぶやいた言葉に、ボックスは苦笑した。大人の世界で、長い間生きてきたボックスにとって、死を目の当たりにするのは初めてではないのだろう。

初めて死をみたとき、どう思ったのか。どう感じたのか。聞いたかと思ったが、それはボックスを傷つけるような気がしてきくことができなかった。

「俺がはじめて人の死をみたのは、大人の世界で知り合った友人だったなあ」

とつぜん、ボックスが言った。

「つか、フーシャのお隣さんだった男でさ。俺のこと、一緒にかくまってくれて。んで、神の子らに殺された。あいつも、フーシャの

こと好きだったからな。だから、俺をかくまった主犯だって言いきって、処刑されたんだ」

「ボックス？」

懐かしさと、わずかな悲しみの色をその目に宿し、ボックスは苦笑した。

「俺は、神の子のなかで力は低いが、珍しい力がある。読心力、っていうの？ 人のところが読めんだよ」

「俺のこころを、読んだのか？」

「悪い。だが、お前も神の子なんだろう？」

「は？ いや、俺はちがう」

ボックスは、きよとした。

「そうなんか？ いや、ところどころお前の考えが読みとれんくてなあ。てつきり、神の子かと」

ぽりぽりとひたいをかいて、その顔に苦笑を浮かべる。

「だが、あんまくよくよすんな。フーシャは歳だった。でも、最後にお前に出会えた。それは幸福なことだろ。俺も、お前に会えてよかったって思うぜ」

ボックスは、ヴィレンドの足を巻いていた布を湖の水で洗いだした。ばしゃばしゃという水音がまた、フーシャと出会ったあの池を思いださせて、胸をしめつけた。

「俺は牢屋にいたから、フーシャのことがサッパリわかんなかった。でもお前がきて、フーシャは最後に幸福な時間を過ごしたことを知れたし、この世にもういないってこともわかった」

「それは、いいことなのか」

「当たり前だ。俺はもう、あの牢屋にいない必要がない。フーシャがいなくなったら、誰に遠慮することなく脱獄できる。現に、今脱獄してきただろ？」

ボックスがこする布は汚くて、なかなか綺麗にはならなかった。それでも少し綺麗になった布を硬くしぼって水気をとると、その布をヴィレンドに手渡した。

「もっててくれ。薬草を探してくる」

「わかるのか」

「俺はもともと、診療担当の神の子だったんだぜ」

ひらひらと手をふって歩いて行くボックスを眺めていたが、その背中が見えなくなると、そっと目を閉じた。

（フーシャ、すまない）

目がしらが、熱くなる。

今まで、泣いたことはなかった。身体が大人の変わると知ったときも、パルスがヴィレンドを逃がすために罪を負ったときも、泣かなかった。それはきっと、これからの生活を考えるあまり、悲しみにひたる余裕すらなかったからなのだろう。

今度は、ボックスがいる。それはヴィレンドにとって、安堵と余裕をあたえた。

あふれてくる涙は、とても新鮮だ。しかし、あまり気持ちのいいものではない、とヴィレンドは思う。

フーシャは、本当にヴィレンドに出会ってよかったのだろうか。大人の世界では、死後の身体はそこに残る。あの身体は、どうなるのだろうか。フーシャが前に教えてくれたように、本当に土にかえるのか。

（フーシャ、すまなかった）

繰り返し、フーシャに対して心の中であやまった。

フーシャは神殿の前で、神殿には神の子がいる、と言っていた。あれはおそらく、ボックスのことを指していたのだろう。

あるとき優しく細められた目は、ボックスを見ていたのだ。まだ生きていると信じ、彼のことを思っていた。

（せめて、一目だけでも会わせてやりたかった）

自分の無力さが、身に染みる。思うだけで、なにもできない自分が、齒がゆくて仕方がない。

（力が欲しい。大切なものを守れるだけの力が）

ヴィレンドは、静かに涙を流した。

しばらくして戻ってきたボックスは、手にいくつかの草と石をもっていた。

すでにヴィレンドの涙は止まり、持っていた布も大分乾いたところだ。

よっこいせ、とかけ声をかけながら、ボックスはヴィレンドの前に座った。

「その薬草は知っている。消毒作用があるとか」

「おおよ。よく知ってんなあ。お前、子ども世界では神殿につかえてたのか？」

「そうだ。戦士として教育を受けていた」

「あー、なるほどなあ。だからそんなお堅いのか」

お堅い、という言葉に少しだけムツとする。せめて、真面目と言っ
てほしいものだ。

「診療担当の神の子はみな、貴殿のようにちゃんぽらんを装っているのか」

今度は、ボックスの表情がひきつった。

口端を妙につりあげ、ヴィレンドをじっとりとみる。

「お前は、妙に観察力があるな。装ってる、っていわれるとは思わなかった」

「違うのか？」

「違わんけどな。お前はデリカシーってもんがねえな。もうちょっと相手に気を使え」

（どつちがだ）

悪態をつくが、口には出さなかった。もっとも、読心力があるというボックスには筒抜けなのかもしれない。

ボックスは、薬草を拾ってきた石の上で潰し始めた。

その作業をながめながら、どうしても浮かんでくるフーシヤの顔を必死で記憶の底へ沈めた。また涙が出そうになり、かたく拳をにぎりしめる。

ボックスはなにも言わない。ただ、おだやかな時間が過ぎた。

しばらくして、洗ったにも関わらず黄ばんだ布で患部が包まれ、

ヴィレンドの足の処置は終わった。

「お前の足、ちゃんとした医療場でみてもらった方がいいな。玉が貫通してたのは不幸中の幸いだが、痕は確実に残るだろう。縫ってやりたいが、針も糸もない。牢でも血をとめるのが限度だった、俺って名医だし」

「すまない。……いや、ありがとう」

「いって。まず医者を探したんだが、ここがなんの世界かわからん以上、きびしいな。医学が発達してたらいいんだが」

「森がある、ということは我ら子どもの世界のように、自然のなかで集落をつくって暮らしているのだろうか」

「さあな。この森が住みかなのか、それとも別に街があるのか。立てるか？」

「問題ない」

ボックスはヴィレンドの腕を支えながら、先に歩き出す。うながされるようにして、ヴィレンドも歩いた。

「さつき、向こうで煙をみた。人はいるだろうが、俺らを受け入れてくれるかわからん。用心しろよ」

「ああ」

足を浮かせながら歩くが、じくじくとしびれに似た痛みは、酷くなっている。

だが、歩けないほどではないし、痛みに苦しむほどじゃない。多少熱があるように思うが、それはヴィレンドにとって大したことではなかった。

とちゅうで繰り返し休みながら、結構な距離を歩いただろう。

いい加減、空腹と疲労が限界だと思ったころ、開けた広場のような場所にでた。広場には人がいて、たくさんのテントのようなものがある。

ヴィレンドたちは茂みに隠れながら、その様子を観察した。

「村、ではないな。あれは、鉄か？」

「製鉄技術があるみたいだな。つーことは、これはキャン普って思った方がいい。他に街があるはずだ」

ヴィレンドは、ボックスの言葉にうなづいた。同じ考えだ。

人々の服は、子どもの世界にいたところと大差ない。だが、女はみな、上下の繋がった裾の長いチュニツクを着ており、男は、裾の短いチュニツクにズボンをはいている。

色はさまざまだが、服の形は性別によって決まっているようだ。年齢は大人が多いが、中にはヴィレンドと大差ない歳のものもいた。だが、それより若い子どもの姿は、みえない。

「出てみるか？」

「うーん。いや、あ、あいつに聞いてみるわ」

ボックスは、ひとりキャンプとは別方向へ歩いていく男を指さした。顔はよくみえないが、歳はヴィレンドと同じくらいだと思われる。たしかに、相手がひとりだと何かあったときに対処しやすい。

「お前はここにいろ。足を休めとけ」

「わかった、無理はするな。あの男が神の子ではないことを、祈っている」

「お前、そういう怖いこと言ったって」

ひらひらと手をふって歩いて行ったボックスを、注意深く見守った。もしあの男がボックスになにかするようならば、自分がなんとかしなければならぬ。

懐に忍ばせてある剣と、金の鍵を確認する。

ここにいろと言われたが、ヴィレンドは這うようにして移動した。ボックスたちの声がきこえる場所で、そつと木々に身をひそめる。

「なあ、お兄さん。ちょっと聞きたいんだけど」

ボックスが、ひょうひょうとした態度で男に近づいていった。男

の後ろにまわったヴィレンドからは、男の表情がみえない。
しかし、ボックスをみた男は驚いているようだ。

（もしや、この世界では老人の存在はないのか）

剣を強く握りしめるヴィレンドだが、

「わ、びっくりした！ もじやもじやだね」

という男の叫び声で、男がボックスの身なりに驚いたのだと、知る。

確かに、長年牢屋で暮らしていたボックスの身なりは、すさまじい。

「いやあ、ずっと旅をしててさ」

「そうなんだ。せめて着替えた方がいいんじゃないかな」

「そうしたいんだけどさあ、実は迷子になっちゃって。街に行きたいんだけど、あのキャンプみたいところで道を聞いた方がいいんじゃないか？」

あつち、とボックスが人々のいる方を指さした。

そのしゅんかん、男のまとう雰囲気が変わった。こころなしか、
空気が張り詰める。

「君はまだ、あの中に入ってたなの？」

男の声が、さっきよりも一段と低い。

「おう、なんか入りずらいっちゃんかさ。確認してから行くかと思っ

「なら行かないで。入ったが最後、二度と出られなくなるよ」

（二度と出られない？）

どういうことだ。ヴィレンドは、少し身体を乗りだした。

「出られないって、なんでなんだ。別にいいじゃん」

「あそこは、隔離されているんだよ。流行り病だ。街のひとは皆怖がつて、一度でもあの中に入ったり、中の人と関わったものを街に入れないんだ」

「それは怖いな。なんて病気なんだ？ ペストか？」

「いや、疱瘡だよ」

「ホウソウ？ なんだそりゃ」

途端に、男が顔をしかめた。

「知らないの？ どんな遠くからきたんだ」

「あはは、いやあ、すっげえ遠く？ みたいなの」

「……。疱瘡は、悪魔の感染症って言われてるんだよ。身体中に発疹ができて、それが化膿してつぶれ、死んでいくんだ」

ヴィレンドはそのとき、ボックスの表情が変わるのに気がついた。それは僅かな変化だったが、全身から警戒をにじませているように見える。

ヴィレンドは、人々が集まっている集落を見た。隔離されるほど、重い病気の人がいるようにはみえない。

もつとも、多くあるテントの中では、どうなっているのかわからないが。

「街に行きたいなら、ここから東に真っ直ぐだよ。結構な距離があるから、徒歩じゃきついかもしれないけど」

「そうか、どうもありがとな。街に向かうわ」

「いや、いいよ別に。かわりに、僕とここで会ったことは誰にも言わないでね」

男はボックスの横を通りすぎ、キャンプとは反対方向へ歩いて行った。

すぐさま、馬のいななきがきこえ、パカラパカラッという馬の足音が遠くなっていく。さっきの男が、馬に乗ってどこかへ行ったようだ。

ヴィレンドは剣をもっていた手をゆるめて、戻ってきたボックスを迎えた。ボックスの表情は陰しく、自然とヴィレンドの表情も陰しくなる。

「移動してたのか。都合がいい。街へ急ごうぜ」

「どうした、突然。流行り病だからか？」

「ああ。まずい、ここは天然痘患者の隔離地区らしい。急いで出よう」

天然痘、という言葉に、ヴィレンドは目をみはった。

子どもの世界にいたときに、決して流行らせてはならない流行り病があった。それが、ペストと天然痘だ。一度発症したが最後、世界が崩壊するとさえ言われていたほどに強力な感染力、そして完治不可能の不治の病だときいている。

（まさか、天然痘が流行っているとは）

ヴィレンドは医師ではない。それがどんなものかは知らないが、どれだけ恐ろしいものかというのは、繰り返し学んできたために、よく理解しているつもりだ。

ボックスに支えられながら、足早にその場から移動した。

影の向きや、太陽の位置。うつすらとみえる星の位置をみながら、東に向かって移動する。

神殿につかえるものはそれなりの教育を受けているため、方角を知ることくらい容易い。

（しかし、異界となるとその知識も正しいのか怪しくなるな）

一番の目印になる星の位置が同じなのは、せめてもの救いだろ。方角がわからない今は、それを信じるしかない。

間違っているのか、それとも遠いからか。

途中で日が暮れはじめ、野宿の準備をすることにした。

幸い、果物は豊富にある。気温も春のようにあたたかく、獣に気をつけて火さえ絶やさなければ、十分眠ることができるだろう。

「ボックス、すまないが木片を集めてきてくれないか。火をつける」
「わかった、んじゃあ果物むいとして」

リンゴのような果物を手渡され、護身用の剣でむいていく。大人の世界では、包丁という便利なものがあつたが、それでもやはり、手に馴染んだ剣の方が使いやすい。

（よくフーシャに怒られたな、なつかしい）

フーシャの見ていないときによく、包丁のかわりに剣で調理したものだ。それに気づくたび、フーシャが「包丁を使いなさい」と言っていた。

もっとも、それもフーシャが元気だったころの話だ。ほとんど歩くことが無くなってからは、負い目を感じていたのか、ヴィレンドが剣で調理をしても何も言わなくなった。

ただ、作ってくれてありがとう、とだけ言ってほほ笑んだ。

果物をむき終えたころ、ボックスが戻ってきた。

「つか、火なんてどうやってつけんだよ」

「火なら、マッチがある。大人の世界は、囚人から武器をとりあげぬのだな」

「そうかもな。異界の住人は恐怖対象だ。関わりたくないんだろ」

マッチは、フーシャと共に泊ったホテルのものだ。ご自由にお持ち帰りください、と書かれていたのを見て、二箱ほど懷に忍び込ませておいた。

乾いた木の葉に火をつけ、形を整えた木片の集まりのなかへとそれをいれる。

沈んでいく太陽と反するように、炎が赤く燃え上がった。火を囲むように座り、夕食の果物を食べた。リングよりも硬く、酸味がよい。しかし食べれなくもない。

ボックスをみれば、顔をしかめながらも黙って食べていた。

食べ終えて一息ついたころ、ボックスがポケットから薬草と石をとりだした。

「さて、と。布を取りかえる。足を出せ」

「変わりの布などないだろう」

「ばっか、なんとでもなるんだよ。清潔にしとちゃんと、部分が腐ってくるぞ」

ボックスはヴィレンドの布をはずすと、筒から水をかけた。牢屋の中で彼がもっていた筒　おそらく、水筒の一種だ　に、湖水をくんでおいたようだ。

「多少強引だが、我慢してくれ。なにしろ、なにも道具がないんだ」
「わかつている、問題ない」

ボックスは軽く笑い、治療に専念した。てきぱきと迷いなく処置をおこなう姿は、どうみても医者だ。

そう思った瞬間、無性におかしくなった。

「おい、随分余裕だな。なにがおかしいんだ？」

「貴殿が医者にみえる」

「どういう意味だ。俺は医者だっつってんだろ」

あきれたような、そんなボックスの声に、ヴィレンドは頷いた。

「ああ。そうなんだが、おかしいものだ」

声に出して笑うと、ボックスも苦笑した。

「ま、今日はゆっくり休め。これからが大変だからな」

「そうだな」

ボックスが突然、着ている服の袖をやぶった。それを縦に裂き、ヴィレンドの足へまいていく。

その様子をみて、ふと目をほそめた。

「貴殿は俺に、人を信じすぎると言ったが、貴殿も十分そうだと思う」

「あー。そうか？ まあ、お前がフーシャを助けようとしてくれたのを見てるし、悪いヤツじゃねえと思ってるからな」

「フーシャは、俺に生きると言った」

わたしが死んでも、ねえ、ヴィレンド。あなたは、ずっと生きてね。

そうフーシャが言っていた。ヴィレンドはその言葉に、まるで誓うように神殿の前でうなづいた。

「だから、俺は生きる」

「おう、生きる。俺も、消えるときがくるまで生きたいねえ」

消える、という懐かしい言葉に、今度はヴィレンドが苦笑した。
ヴィレンドたちを待っているのは、死ではなく消滅だ。

もしかすると、消える前になんらかの形で命が去るようなことがあれば、死という形で最後を迎えるのかもしれないが。

「貴殿とは、いろいろ話したいことがある。子どもの世界や大人の
世界のことわりについて」

ヴィレンドはそう呟いて、あくびをかみしめた。今日は様々なこ
とが起こりすぎて、とても疲れていた。

「俺もだ。こんなことを誰かと話せるなんて、嬉しいねえ。明日が
楽しみだ」

「ああ、明日、また」

炎を見つめていたヴィレンドの視線が、さがる。手当てをされた
足を見つめたまま、徐々に瞼がおりていった。

4、運命の出会い

翌日は早朝に起きて、移動をはじめた。

昼になるうかというとき、人が住む形跡が見え始めて、それから少し歩いたところに街があった。

森をぬけた場所からは、少しばかり高いならかな斜面がつづいている。その斜面に沿うように、街がある。ところどころ街を囲むように壁があり、まるで街そのものが巨大な屋敷のようにもみえた。

街にはいると、そこでチュニツクをきた人々の姿がみえた。

やはり、性別によって服の形がわけられているようだ。

圧倒的に男の人口の方が多いが、ときおり見かける女は裾の長いチュニツクを着ている。

コンクリートで整備された道に沿って足を進めれば、左右には露店がひろがっていた。

地面に直接布をひろげ、その上で食べ物や小物を売っている。どうやらこの道が大通りらしく、ところどころで細い道へ分かれていた。

「なんというか。子どもの世界以上に文明が発達してはいるが、大人の世界ほどではないな」

「そうだなあ」

すぐ隣を、馬車が走って行った。

大人の世界でみたような、馬の後ろに四角い屋根のつきの箱がついている馬車ではない。せり出した椅子だけがくつついた、簡素なものだ。

道はコンクリートで整備してはあるが歩道の完備はされておらず、

道全体が歩道と化している。馬車の数は少なく、特別に立派な身なりのものが馬車に乗っているようだ。

「もしかしたら、電気がないのかもなあ。科学が発達してないのかもしれないねえ」

「たしかに、電気で動く機械がない」

「とにかく、医者を探すぞ。幸い、この世界は姿かたちで決められてるわけじゃないらしい」

道を歩く人々の年齢は様々だ。かなり高齢の者もいれば、ヴィレンドと近いだろうと思われる、大人になりかけの年齢のものも多い。

「子どもはいねえな」

「そうだな。あ、いや。あそこにいる」

「ほんとだ。いくつくらいなんだろうな」

家の窓から、外をながめている子どもがいた。しかし、子どもの世界でみた子どもよりも、身体が小さいように思う。

（小さいとは、どういうことだ）

もしかすると、子どもから大人になるように。子どもよりも前に、成長段階があるのかもしれない。

大人の世界で生まれた大人が、「二十歳」の姿で生まれると言われていた。不思議なことに、二十歳の姿で生まれてくるが、生まれた当時の年齢は零歳と計算し、その後二十年過ぎたところから身体が成長をはじめるといふ。

大人の世界で、それを知ったヴィレンドは驚いた。

そもそも、子どもの世界では歳を数える習慣がなく、一年が三百六十五日だということさえ、知られていなかった。

だから、ヴィレンドは実際の歳を知らないし、生まれてから何歳なのか、いつごろから身体が成長をはじめたのか、わからない。しかし、「成長する」ことを「歳をとる」とも言われており、もしかすると元々子どもの世界でも歳を数える習慣はあったのかもしれない。

「お。ここじゃね？」

ボックスが鼻をひくつかせた。

「こっちから、薬の匂いがするぞ」

そこは、普通の簡素な一軒家だった。

みた感じ、医者がいるとは思えない。

家の前には観賞用の木が一本置かれているようだが、それも枯れていた。

この家が、目立って簡素なわけではない。しかし、大人の世界での医者は、裕福でお金持ちな者が多く、そのほとんどが贅沢な暮らしをしていた。

そのため、どうもこの普通の家が「医者の家」と言われても、いまいち違和感がある。

ボックスは、そんなヴィレンドの胸中を知ってかしらずか、ドンドンとその家のドアを叩いた。

「こんちわー」

少し大きな声で、ボックスがさけぶ。だが、返事はない。

「留守か」

「どうだろ。こんちわー！」

ボックスが、さらに声をはりあげた。

「はい」

奥から女性の声がした。

「お、誰かいるいる。よかったー」

笑うボックスだが、ヴィレンドは警戒を強めた。

まだこの世界が安全と決まったわけではないし、なにより自分は怪我をしている。なにかあれば、逃げきれぬ保証もない。

しばらくして、バタバタと誰かが走ってくる音がした。

足音がドア越しに止まったかと思うとドアが開いて、中から若い女の人が顔をのぞかせた。

外見はヴィレンドと同じくらいの歳か、少し下かもしれない。

「きゃ！ なにこれ！」

ドアから顔だけを出した女の方は、ボックスを見るなりおどろいて悲鳴をあげた。

次の瞬間、女の方はまた家へ入ってしまったが、すぐにドアの間から顔だけをのぞかせた。

「わあ、おどろいた。もっさもさなのねえ」

どうやら、この女の方もボックスの身なりに驚いたようだ。

ボックスが笑って、「いやあ、すぐ髪がのびちゃって」などと話している間に、ヴィレンドは女の人をみた。自然と目がいつてしまい、知らずのうちの観察してしまう。

黒くて長い髪を無造作にうしろでしばり、大きな目は光に満ちているように輝いている。

とても、綺麗な目だ。

（おどろいた。同じほどの歳の、女もいるのか）

子どもの世界では、ほとんどが男だった。女は法殿に数人いたくらいで、あまりみる機会もなかった。

大人の世界では男女の割合は半分ずつだったが、ヴィレンドのうにまだ若い歳の、女をみることはなかった。

人の多かった神殿の前でさえ、外見が三十歳をすぎるくらいの女が一番若かったように思う。

「んでさ。そろそろ髪切ろうと思ってて」

「やだもう！　うちは床屋じゃないわよ」

あはは、と笑う女の人。その笑顔がとても可愛くみえて、ヴィレンドは食い入るように彼女をみつめた。

「じゃあ、何屋さんなんだ？」

「うちは医者です」

「医者か！　まいったまいった。ほうら、な？　みるヴィレンド！」

ふりむいたボックスの目が、輝いていた。医者だというのを、当たったことが嬉しいようだ。

ボックスの視線につられるように、女の人がドアから身体を乗りだしてきた。

大きくドアが開かれ、全身が露わになる。随分と小柄なようで、まるで小動物のようだ。

女の人の、大きな黒真珠のような目と、視線がぶつかった。

その瞬間、ドクリと心音が高鳴るのを感じて、とつさに胸を抑える。

「医者をさがしてたの？　あなたが病人かしら。胸が苦しいの？」

「あ、いや。その」

「病人というか、怪我人なんだわ。見てやつてもらえねえかな」

言葉が出てこなかったヴィレンドのかわりに、ボックスが答えた。

「ええ。どうぞ、入って」

ボックスに支えられたまま、ヴィレンドは家のなかへと入った。

その間も、前を歩く女の人をから目が離せない。長い髪が、背中
で揺れている。

「こっちに座って。実は父が医者なんだけど、今はいないのよ。あ
たしがみてあげる」

そういうと、女の人は奥の部屋に消えて行った。

「へえ。家のなかって結構しつかりしてんな。家電がないくらいで、
あつちとあんまり変わんねえし。っておい、きいてるかヴィレンド」

ボックスに肩をゆすられ、ヴィレンドは我に返った。

「あ、ああ。そうだな」

言われてはじめて、女の人の姿がないことに気がついた。

部屋の奥に消えてからも、その姿を追うようにドアを見つめてい
たらしい。

ヴィレンドは、そんな自分のおかしな動作をごまかすように、部
屋中をみた。

たしかに、フーシャの家と大差ない。むしろフーシャの家よりも
広く、さらに奥に続くドアもあった。

室内には、診療に使うのだろうと思われる薬品の入った棚や、診
療道具が置かれている。ほかには、待ち椅子だろう長椅子がひとつ
と、観賞用の木がある。観賞用の木の隣には、可愛らしいウサギの

形の人形が箱の上に置かれていた。

家の外見と違い、中はとてもしつかりとできている。この国のひとは、外装にはこだわらないのかもしれない。

ヴィレンドは、指定された椅子に座った。

ボックスがしゃがみこみ、ヴィレンドの足に巻いていた布をはずす。そのまま近くにあった別の椅子へ、怪我をした右足をのせた。

怪我をした患部がみえて、ヴィレンドは顔をしかめた。初めてみた患部は、化膿して傷口が白く変色している。自分の足ながら、その傷口に気持ち悪さを覚えた。

そこへ、さっきの女の人に戻ってきた。両手に包帯や薬をもっている。

「あたし、ピカラっていうの。よろしくね」

「俺は、ボックス。こいつは、ヴィレンド。よろしく頼むわ」

「んじゃあ、怪我を見せて、って。どしたのこれ!」

ピカラはヴィレンドの足をみるなり、すぐ近くへ飛んできた。あまりにとつぜん近くにきたため、ヴィレンドは息をつめる。

「触るわよ」

ピカラが手袋をして、ヴィレンドの足に触れた。

「なによこれ。槍でも刺したわけ? 傷が反対側まで貫通してる。」

患部もこれ、火傷じゃないわよね。どういう怪我の仕方をしたの?」

「あー、なんか刺さったみたいでさ」

「言いたくないなら、構わないけど。この場所じゃあ、歩くたびに痛むでしょう」

ピカラが、てきぱきと処置をしていく。ボックスほどの手際のはさはないが、触れられた手がとても温かく、すぐにでも治るような

気がした。

「もっと早く手当てするべきだったわね。化膿してる。熱はない？
あ、胸はいいの？」

ピカラがきいてきた。真っ直ぐに目が合って、ドクンと胸の音が
ひとときわ高鳴る。

「あ、ああ。問題ない」

「そうなの？ 遠慮なくていいのよ」

あわてて、胸をおさえていた手をはなした。無意識に胸を押さえ
ていたらしい。

そのとき、やけにニヤニヤしながらこっちをみるボックスに気が
ついて、軽くにらみつけた。

「ふーん。なるほどなあ」

「……なんだ」

「べっつにい。お前がなあ、意外っつーかなんっーか」

「なにが言いたい」

ボックスの言いたいことがわからない。にやけた笑みを浮かべる
表情に、苛立ちを覚えた。

「あなたたち見ない顔だけど」

手当てを終えたピカラが、取り外した包帯などの残骸をトレイごと
と棚へ置いた。ゴミ箱だろう入れものへ、分別しながら投げ入れて
いく。

「この街のひとじゃないわよね。どこからきたの？」

「んー、遠いところなあ」

「あら、それも言えないのね。残念だね。じゃあ、少しだけ質問させて！」

ピカラが、真っ直ぐにボックスをみた。ボックスは、おうよと頷いて、両腕をくむ。まるで、どんとこい！と言っているようだ。

「答えられるとこだけでいいわ。それを、治療費にしろといてあげる」「おっしや。実は一文無しでなあ」

「あら、そうなの？　じゃあ、一つ目の質問。彼の足を治療したのは、誰？」

彼、とヴィレンドを指さすピカラ。

収まりかけていた心音が、また大きく高鳴った。どくどくどくと少しずつ速さを増していく。

「あー、それは俺だ」

ぼりぼりと頭をかくボックス。

ピカラが、驚いて目を見開いた。

「あなたなの？　傷口に塗ってあったのって、ナツメの葉よね。それもすりつぶしただけの」

「そ。ナツメには、炎症を治す効果がある。腫れやできものは勿論、傷口に直接塗ってもいい数少ない薬草だな」

「そんなの、聞いたことない。薬草って、そもそも飲むものでしょ？」

「いんや。口からの摂取が基本的だけど、それには決まった煎じ方が必要だろ。それ以外にも、塗り薬としてすぐ使う方法があるんだ」

どうやら、薬草について相違があるようだ。

ヴィレンドにはわからないことばかりだが、ピカラはとても興味

があるらしい。少しでも、医学を学んでおけばよかった。

そうすれば、自分もこの会話に入っていけるのに。

そこまで考えて、驚いた。ボックスは医者として子どもの世界で学んできたのだし、ヴィレンドは戦士として学んできた。

それぞれの役割があるというのに、それをうらやむのはおかしい。

「ねえ、あなたたち今日泊まるどころ、決まってるの？ よかったらうちに泊まっていかない？」

ピカラが言った。

「こんな怪しい二人組を泊めてもいいのか？ 不用心だぞ」

「そりゃ怪しいけど。でも、あなたの医術に全く興味があるの！」

「へえ。なるほどな。んじゃあ、俺の知識を惜しげもなく伝授するかあ」

二人の会話をきいていると、どうやら泊まることになったようだ。

この世界にきて、何もかもがわからない今では、とても助かる。

昨夜につづき野宿では、身体が休められない。

ピカラは、奥の部屋にヴィレンドたちを案内した。

そこはいわゆる書斎で、壁は本棚で埋め尽くされていた。本棚には本が所せましと並んでいるが、ヴィレンドには背表紙の文字さえ、読むことができない。

（いや、読めないこともないかもしれない）

ヴィレンドは本棚の前に歩み寄ると、一冊の分厚い本を手に取った。

大人の世界で学んだ文字と、よく似ている。まったくの同じではないが、近い字をあてはめながら、読むことができる。

「伝染、病？」

「ああ。最近ね、伝染病がはやってて。その関係の本が多いのよ」

題名はあっているらしい。振り返ると、ピカラがカップに茶を煎れていた。部屋を中心に置かれた木製の椅子に座ると、目の前にカップが差し出される。

そのまま、向かい側の椅子にピカラも座った。

「あなた、歩いて大丈夫？　松葉杖貸しましょうか」
「問題ない」

「コイツ丈夫だから、平気だろ。もともと戦士として、厳しく育てられたヤツだし」

差し出されたカップに、手をのばす。温かい湯気が顔にあたり、とてもいい香りがした。ちらりとボックスをみるが、すでにカップに口をつけていた。

（早いな）

遠慮と警戒心のなさに、少し呆れる。

ヴィレンドもカップに口をつけようとして、ふと思いついた。

（そうか、ボックスには読心術がある）

ボックスには、ピカラの考えていることがわかるのだろう。それは敵か味方を区別するときに、とても役立つ。

「戦士、ってどこかの名家に仕えていたの？」

「そんなもんかな。あ、菓子も食っていい？」

「どうぞ。お腹すいてるのね。お金ないんだっけ」

「そそ。昨日も野宿でさ」

机の上におかれた菓子をつまみ、口にいれるボックス。クッキー

のような白いそれをボリボリとかみ砕き、ごくんと飲み込む。

「あ、これうまいなあ」

「そう？ それはよかった。ところで、ねえ。あなた医者なんですよ？ 力を貸してくれないかしら」

ピカラが、身体を乗りだしてくる。

「やだね」

「まだ何も言ってないわ」

「伝染病の治療なら、俺はしない」

きっぱりと言い切ったボックスに、ピカラは目をみはった。ヴィレンドも、驚いたようにボックスをみた。

そして同時に、納得する。ピカラは、医学に興味があると言った。そして、伝染病が流行っているとも言っていた。

ならば、そのためにボックスが必要で、泊まらないかと声をかけたのだらう。ボックスは最初から、ピカラの目当てをわかっていたのだ。

「……なんでわかったの？」

「バレバレだっちゅーの」

「別に、直接患者の手当てを頼みたいわけじゃないの。ちょっとだけ力を貸してほしいのよ。ボックス、あなた今、俺はしないうって言ったわ。俺にはできない、じゃなくて。もしかして、治療法を知ってるんじゃないの？」

さらに身体を乗りだしてくるピカラ。ボックスは焦ることもなく、変わらず菓子をボリボリと食べている。

「言葉のあやだろ。そもそも、どんな伝染病かも聞いちゃいねえのに、わかるわけないだろが」

わかるわけない、という言葉をきいて、ヴィレンドは微かに眉を

ひそめた。それを隠すように、カップに口をつけて茶を飲む。

ボックスは今、嘘をついた。森の中で、男に流行り病についてきいたはずだ。

それを聞いていなかったことにしてまで治療を拒むほど、恐ろしい伝染病なのか。

「疱瘡よ。あなたも知ってるでしょう？ 悪魔の感染症って言われてて、今、大勢のひとが隔離されてるの」

「そりゃ、賢明な判断だ」

「なんとか、治せないかしら」

「ずずず、と茶を飲み干すと、ボックスは大きくゲップをした。

「その疱瘡ってヤツは、そんなに広がってるのか」

「街は、だいじょうぶよ。発病者がでたとき、その患者にかかわった人たちみんな、一緒に隔離させられたもの。健康な人もみんな一緒によ？」

「それで、俺にどうしろって？ 隔離されたんなら、もう行けねえじゃん。アンタ、どうするつもりなんだ」

「行くわ。戻れなくてもいいの。一緒に隔離されたとしても、助けたい人がいるの！」

「そいつの歳は？ 発症してから、何日経った」

「歳は、二十二歳。発症してから、多分十日くらい」

ピカラの顔に、笑みはない。必死だった。

泣きそうだと思ったが、実際に涙を流すことはなく、真っ直ぐボックスを見つめている。

ボックスはそんなピカラをの目を見返して、静かに首をふった。

「発症から十日じゃ、もう無理だ」

「どうして！」

「今頃、高熱が出ているはずだ。まだかもしれんが、次の高熱が出たが最後。もう、死ぬしかない」

ピカラは、何か言おうと口をひらいた。しかし、すぐに口をとじて、椅子に座った。

「無理言つて、ごめんなさい」

「いや、泊めてもらうのに、力になれず悪りいな」
「ううん、いいの。ゆっくりしていつてね」

そう言つと、ピカラは力なく笑った。

その笑みをみた途端、胸が苦しくなった。

（ピカラの力になってやりたいが）
ちらり、とボックスをみた。まるで話を聞かなかったように、変わらず菓子を食べている。ボックスが無理だというのなら、ヴィレンドにできることなどないのだろう。

茶を飲み終えたころ、ピカラはさらに奥の部屋を案内へと二人を案内した。父親の部屋だというその部屋は、書斎同様、多くの本が置かれていた。

「ここを使つて。二人で使うには、ちょうどいいと思うんだけど。
ベッドはごめんなさい、ひとつしかないの」
「おう、ありがとさん」

ピカラが出て行くと、ボックスは真面目な顔になって黙り込んだ。ヴィレンドは突然静かになった部屋内で、手元にあつた本を一冊手にとってぱらぱらとめくった。

読める範囲で、目に付いた題名を読んでいく。
感染症、遺伝、流行り病。病気に関する辞典のようだ。

「まずは、この世界ことを知らねばならないな。……ボックス、落

ち込むな」

ボックスは仏頂面のまま、軽くため息をついた。

「落ち込んだじゃいねえよ。俺は神の子で医者だが、神や法王じゃねえ。無条件に万民を救えるほど、えらくねえよ」

そう言つて、ボックスもまた、近くにあつた本を引き寄せた。

「幸い、字がまだ読めるのはよかった。本からも学ぶことができるしなあ。つかさ、俺よりもお前、落ち込んでんじゃねえの？」

「なぜ、俺が？」

「あの子に惚れたんだろ？ 残念だったな。あの必死な顔。助けたいやツつて、絶対男だぜ。恋人かな」

「惚れたというのは、よくわからん。そもそも、同じ歳ほどの異性に会つのも、初めてだ」

軽く息をはいて、近くにあつた椅子へと座つた。じわりと痛む足を、同じように座席へ置く。高いところにあげると、不思議と少し痛みがマシになった。

「ああ。子どもの世界だと、圧倒的に男が多かつたもんな。大人の世界だと、男女の比率は半々でさ。それもなにか意味があんのかな」

意味、という言葉に、ヴィレンドは静かに頷いた。

異界は、いったいいくつあるのだろうか。まったくの別世界、だと思つていたけれど、言葉が通じる。そのほかに、大人の世界にも命の樹があつたように、基本的な摂理は同じらしい。

つまり、異界ごとに全くの別の世界が広がっているわけではないようだ。

「なぜ、性別を分ける必要があるのだろうな。大人の世界の結婚という関係も、男女しかできなかったらどう？ 同じ性別ではなぜ駄

目なのだろうか」

しん、と部屋が静かになった。

ボックスの返事がないことをいぶかって、ヴィレンドはボックスをみた。

（何をしているのだろうか？）

さきほど手に取った本のページを見つめたまま、固まっている。

「どうした、ボックス。妙なことでも乗っていたか」

「……乗ってた」

「なにが？」

「この世界では、命は女の身体から生まれるらしい」

「は？」

意味がわからず、ヴィレンドはボックスの顔をまじまじと見つめた。冗談を言っているわけではないようだ。

言ったボックス本人でさえ、その声音は驚きをおびていた。

「なんだコレ。嘘だろ」

「なんだ、どうした」

ボックスは、うなるよう黙りこみ、穴があくほど本を読み続けた。
（どういう意味だ？ 命が女の身体から生まれる？）

ヴォレンドには、さっぱり意味がわからない。

人は、命の樹から生まれてくる。それは間違いない。子どもの世界でも、大人の世界でも、それが絶対的なことわりだった。

この世界では、それが違うというのか。

「……それで、男と女が必要なのか」

ボックスが、不意につぶやいた。

「なら、この世界は進んでるってことか。それとも、この世界が」

「ボックス、説明してくれ。意味がわからない」

「つまりだ！ 俺らの世界みたいに、この世界では命の樹から人が生まれるんじゃない。じゃあ、人間はどこから生まれてくるのか？

人の腹からだ！」

「腹？」

とつさに、ヴィレンドは自分の腹を押さえた。

（人の腹から、子どもが生まれる？ そんな馬鹿な）

「女だけみたいだな。ただし、子どもを腹に宿すには男がいる。お
もに、夫婦の間に子どもができるみてえだ」

「夫婦？ では、この世界にも結婚があるのか」

「そうだ。つか、大人の世界では結婚はあまり必要なかったけど、
こっちはほとんどの人が結婚をするらしい。結婚して、子どもをう
む。その繰り返しで、この世界が成り立っているようだ」

「では、命の樹は？ 命の樹は絶対的な存在のはずだ」

「わかんねえ。この世界は、なにかもが違うみたいだな」

ボックスは頭をかきながら、ため息をついた。

「でもこの世界は興味深い。医者の俺としてはな」

（命の樹がない世界、か）

考えもしなかった。そんな世界が、存在するなど。

まだ決まったわけではないが、ありえるはなしだ。命の樹からで

はなく、別の方法で人が生まれるのだとすれば、命の樹は存在意味を失う。

「ま、おいおい調べていこうや。今は、天然痘に気をつけておけよ」
「ああ。ピカラムも言っていたが、そんなにひどい病なのか」

「身体中に、腫れものができる。顔は勿論、手足、腹、背中、それと内臓。二度目の高熱が最後だ。身体は弱り、そのまま死ぬ」

「治療法は？」

「それも完全じゃない。だから、天然痘は脅威なんだ」
ボックスはそういつて、顔をしかめた。

ヴィレンドは、医学のことはわからない。大人の世界にいたころも、医学書などほとんど読んだことがなかった。高齢者に関する書物ならばいくつか読んだが、根本的な医学とはまた違うものだ。

（昨日は、あの集落に入らなくてよかった）

昨日、ボックスが止めていなければ、ヴィレンドはあの集落に足を踏み入れていただろう。感染したとみなされ、踏み入れたら二度とでることはできなくなるところだった。

実際に感染し、命を落とす確率も高くなる。

「とりあえず、少し休もう。ボックス、貴殿はどうする？」

「俺はもう少し、本を見る。興味深いんだ、これが」

「わかった。すまないが、少し横になる」

「ああ。また熱が出てきたらちゃんと冷やしてやるから、安心しなけ」

ヴィレンドは少し笑うと、部屋に置かれたベッドに横になった。部屋には、ベッドが一つしかない。つまり、ヴィレンドかボックス

のうち一人は長椅子で眠らなければならないということだ。

（夕方には起きよう。ボックスにベッドを使ってもらわねば）

横になると、すぐに睡魔がでてくる。

ただの過労だとは思うが、もしかすると足の怪我のせいで身体が弱っているのかもしれない。

あつという間に眠りにおちたヴィレンドは、夢をみた。

懐かしい、子どもの世界にいたころの夢で、唯一友と呼べる相手

パルスの夢だ。

パルスは、夢の中で笑っていた。とても楽しそうに、神の子の力をみせてくれた。

懐かしく、胸の奥から熱が込み上げてくる。

「……パルス」

ふ、と目が覚めた。

辺りは薄暗く、ここがピカラの父親の部屋だと理解するのに、時間がかかった。

出かけたのか、ボックスの姿はない。

身体を起こし、いつの間に置かれたのか、枕元にあった水差しに手をかけた。

水で喉をつるおして、ほっと息をつく。

（パルスは、どうしているだろう）

先ほど見た夢のなかのパルスが、笑っていたことに安心する。

今まで、なるべく考えないようにしてきたつもりだった。パルスは法王に逆らって、禁忌とされている異界へ、ヴィレンドを送ったのだ。

無事なはずがない。捕えられて牢屋暮らしなのか、酷い拷問を受けているのか。

いや、命があれば、まだいい方かもしれない。

（最悪の場合、パルスは……）

そこまで考えて、首をふった。

あのとき、パルスも一緒に異界へこればよかった。あの状況でそれが可能だったのかはわからないけれど。

パルス、それにフーシャ。

ヴィレンドのために、皆が不幸になる。

「しっかりし」。弱気になって、どうする

声をだして、自分に言い聞かせた。声に出さねば、耐えられなかった。

（ボックスは、いつ帰ってくるのだろう）

夜の闇は、人の弱い部分をひきずりだす。

陽が沈んだばかりの、薄いコーヒーを流したような部屋の中では、よくないことしか考えられなくなってしまふ。

ヴィレンドは、立ち上がると部屋を出た。

昼間、茶を飲んだ書斎には誰もいない。薄暗く、人の気配さえないようだ。

さらに、治療してもらった診療室まで足を進めたが、やはり誰の姿もない。

「……誰もいないのか」

ボックスは、この世界に興味をもっていたし、探索にでも行つて

いるのかもしれない。

ピカラは医者の子だし、どこか治療に行っているのだろう。グイレンドは昼間治療を行った椅子に座ると、黙って部屋をみまわした。コツコツコツと壁時計の秒針が動いている。

時計は、大人の世界のものと同じ形をしている。この世界も一日が二十四時間のようだ。

ではやはり、一年は三百六十五日なのだろう。

大通り側の壁越しに、僅かに人の声がした。来客かと思って顔を向けたが、声はだんだんと遠くなっていく。

家の前を、通りかかっただけらしい。

（他にも、人がいるのか……当たり前か）

まるで、世界に自分だけののような錯覚をおぼえていた。誰も知らぬ人の声がきこえただけで、ほっと安心する。

グイレンドは、ポケットをまさぐった。なかから金の鍵を取り出し、それを眺める。

この鍵に、本当に願いをかなえる力があるのだろうか。

パルスから、もらった最後の贈り物だ。結局、一度も使っていない。

（そういえば、この世界にくるときに。ボックスが、使っていたな）

ボックスは、時空の扉というものを開くのに使っていた。大事なもののだから、失くすなとも言っていた。

ではやはり、この鍵は特別な存在なのだろう。

「ピカラ、いる？」

不意に、男の声がした。

通り側の、ドアの向こうだ。

「ピカラ？」

男がまた、呼んだ。すぐにドンドンと扉を叩く音もする。

（この声、どこかで聞いたことがある）

少し低い、けれども透き通った綺麗な声だ。

思い出そうとするが、男のピカラを呼ぶ声に邪魔をされて、思うように考えることができない。

「おい、ピカラ！ いないの？ あ、空いてる」

ギィ、とドアが開いた。ロウソクを持った白いチュニック姿の男が、部屋にはいつてきた。

その男の顔をみた瞬間、ヴィレンドは固まった。思考を停止した、と言った方が正しいかも知れない。

なぜならば、ヴィレンドのよく知る男の顔だったからだ。

（嘘だろう？ なぜだ、いや、しかし！）

中性的な顔立ちに、女性のように線の細い身体。ロウソクを持つ細い指先まで、同じではないか。

間違いない。子どもの世界で別れてきたはずの、パルスだ。

ヴィレンドは、立ち上がった。相手の男は、それに驚いて一歩うしろにさがった。

「なぜ、ここにいるんだ？ まさか、移動してきたのか？」

「は？ なんだい、君は」

男は、怪しいものでもみるような目で、ヴィレンドをみた。

ヴィレンドは、歩み寄ろうとした足をその場で止めた。

（パルス……じゃない？）

よくみるまでもなく、相手は自分と変わらない歳の男だ。声も高めではなるが、男性独特の低い声をしている。

パルスが成長すれば、この男のようになるのだろう。

「すまない。人違いだ……親友に似ていたものだから、つい」

謝ると、男は苦笑いを浮かべた。

「いや、いいよ別に。それより、ピカラはどうしたの？」

「今はいないようだ。どこに行ったかはわからない」

男はドアをしめると、そばへ歩み寄ってきた。ロウソクの火をヴィレンドの近くにあった小卓へ置くと、そばにあった椅子へ座った。

「なら、待たせてもらっ」

「そうしてくれ」

ヴィレンドは、炎の影がうつる男の顔を見た。

（やはり、パルスに似ている）

しかしさきほど聞いたことがあると思った声は、パルスのもではない。それとは別に、この男に会った気がするのだが、思い出せない。

「あんまり見つめられると、穴があくよ」

男がまた苦笑して、ヴィレンドをみた。

「あまりに綺麗な顔をしていたから、見入ってしまった」

「あはは、面白いこというね。でもあんまり、そんなこと言わない

方がいい。ぼくは、嫌われ者だからね」

「嫌われもの？ なにかしたのか」

「何もしてないよ。僕はね、生まれつき変な力があるんだ」

ヴィレンドは、驚いて男をみた。変な力とはつまり、神の子だということか。

人の腹から命が生まれるこの世界でも、神の子は生まれるらしい。

「変だな、初めて会う君に、こんなことを話しちゃうなんて。でも、すぐにばれることだから、いいか」

「どんな力なんだ？ 別に、人を困らせているわけではないのだろう。役に立つならあるだけいいじゃないか」

ヴィレンドが言うと、男は驚いて顔をあげた。

その目がこぼれんばかりに見開かれていて、ヴィレンドの方がおどろいた。

「気持ち悪くないの？僕は悪魔の子かもしれないよ」

「悪魔？ ああ、魔物ということか。魔物にはそんな力はない。特殊な力をさずけるのは、神の役目じゃないのか」

「神？ 神様？ そんなふうに言われたのは、初めてだ」

男は、少しだけ笑った。その屈託ない笑顔はやはり、パルスによく似ていた。

「君は、この街の住人じゃないんだね」

「なぜわかる？」

「僕を知らないから。僕は、この街では嫌われ者で有名だからね。小さいころからずっと、街のはずれに住んでるんだ」

嫌われ者。その言葉に、ヴィレンドは軽く眉をひそめた。

（むしろ、この男が神の子ならば、尊敬してもいいほどだ）

大人の世界では神の子というだけで、地位や名誉が与えられたというのに。

この世界では、嫌われる対象にしかないのか。

ヴィレンドは、男をみた。

（……きいてみるか）

どうしても、知りたいことがある。

ヴィレンドは、相手のいかなる動揺も見逃さないよう注意深く見つめながら、ゆっくりと口をひらいた。

「貴殿は、命の樹を知っているか」

「命の樹？」

「そうだ。知らないか？」

「うん、知らない。きいたことないけど。君の落し物かなにか？」

男が、軽く首をかしげた。

（嘘を、言っているようにはみえない。ならばやはり、この世界の命は人の腹からのみ、生まれてくるのか）

命の樹がない世界があるとは思わなかったヴィレンドにとって、それは信じられないことだった。

すべての母であり、命の源である命の樹。その命の樹が、ときおり特殊な力を与える人間がいる。それが、神の子だといわれてきた。

（神の子の力は、命の樹が与えるのではないのか）

この目の前に座る男が神の子だとすれば、人の腹から生まれた子

も神の子になるということだ。

「では君は、人の腹からうまれたのか」

「え？ そうだと思うよ」

「思う？」

「僕は、小さいころに親に捨てられたから」

親というのは、ヴィレンドにとっては命の樹のことだ。しかし、人の腹から人が生まれるこの世界では、その生んだ人間のことを「親」と言っのだろう。

（その親に、捨てられたのか）

「こんな力、やっぱりなんの意味ももたないよ。僕の母さんだって、気持ち悪がって僕を捨てたくらいなんだから」

悲しげに笑うと、男は時計をみた。

静かな部屋に響く秒針の音が、とてもうるさい。

「ピカラ、遅いね」

「そうだな。もう、外も暗いというのに」

また、しんと静寂が落ちた。

そのときまた、ドアの向こうで話し声がきこえた。

ピカラとボックスが帰ってきたのかと思ったが、近づいてきた話し声は知らぬ者の声だ。

家の前を通りすぎ、どんどん声が遠くなっていく。

「僕ね。親に捨てられたあと、ポルビア先生に拾われたんだ」

ふと、男が話し出した。

ヴィレンドはそつと、耳を傾ける。

「街の人たちの反対で、一緒には暮らせなかったけど。でも、ポールビア先生は僕を実の息子みたいに可愛がってくれて、テッドと一緒に、街はずれの僕の家によく遊びにきてくれたんだ」

「それは、誰だ」

「ピカラのお父さんと、お兄さんだよ。二人とも、名医なんだ」

「そうか。会ったことがない」

「うん。二人とも、今は隔離されてるから」

隔離ということは、天然痘にかかったということか。

（そうか。この声、あのときの男か）

ヴィレンドは、思い出した。この男の声に聞き覚えがあると思っただが、隔離された人々の手前でボックスが道をきいた、あのときの男だ。

「テッドが高熱をだしたんだ。もう助からないかもしれない。だから、代わりに手紙を預かってきたんだけど」

そのとき。玄関のドアが、ガチャリがひらいた。

突然の訪問者は、部屋に入ったところで立ち止まり、ヴィレンドたちをながめた。

かなり高齢の男だが、歳を感じさせない動きだ。目元と口元の深い皺が、男の顔を厳めしくみせている。

「おー、なに？ 出迎え？」

「……ボックス？」

ボックスの声だ。

「いやあ、ほら。あんまり伸び放題だったから、小ざっぱりしてきた」

「ひげも剃ったのか。というか、別人じゃないのか」

「うわ、ひつでえ。あれ、確かお前、森で会ったヤツじゃん」

ボックスが、男をみた。

「あ、あのと時の。よかった、街に着いたんだ」
「おうよ。ありがとなあ」

ボックスは近くまでくると、ポケットから取り出した箱を机においた。

椅子に座ると、箱を開いて中身を確認している。

「おい、ヴィレンド。手を出せ」

「手を？ なぜ」

「さっぱりしたあと、この街をみてきたんだけど。まずい、街の西側で、天然痘患者が出たらしい。俺たちも歩いた道筋だ」

ぎょつとして、ボックスを見返した。

「馬鹿な、患者は完全に隔離されているのではないのか」

「天然痘は、潜伏期間があるんだ。かかってから、発症までに数日を要する。発症するまで、かかっているかどうかからんから、その間に広がっちゃうこともあるんだ」

「待って、天然痘って疱瘡のこと？ この街で患者がでたのっ？」

男が、立ち上がった。

その目は見開かれ、拳は強く握りしめられている。

「そうだ。発症患者を隔離しただけじゃあ、感染は止まんねえ。悪魔の感染症ってのは、そういうことだ」

「そんなっ、ピカラは？ まさか、それをきいて治療に向かったんじゃないっ」

男がドアへ向かって駆けだした。その腕を、ヴィレンドがつかむ。

「待て、行くな」

「どうして！ ピカラだけでも、無事でいてくれないと」
「行ってなにができる」

男は、ヴィレンドを睨みつけた。だが、すぐにその視線をさげ、もとの椅子へと座った。

わかっているのだ。自分が行ったところで、なにもしないと。それどころか、この男は街に住めないほど民衆に嫌われているという。そんな嫌われものが天然痘患者のもとへ駆けつけたら、人々はどう思うだろう。

流行り病をすべて、この男のせいにされかねない。

「ま、そういうわけだ。お前も感染してる可能性がある。そこで、種痘を打とうと思う」

ボックスが、さきほど机においた箱から、耳かきのような細長い鉄の棒を取り出した。

「種痘？ なんだそれは」

「天然痘の予防薬だ。いわゆる、ワクチンってヤツだな」

「ワクチン？ 天然痘にそんなものがあるのか」

驚くヴィレンドと同様に、うなだれていた男も勢いよく顔をあげた。驚きに、目を見張っている。

「だが、完全じゃない。まだだが、このワクチンが原因で命を落とすものもいる」

ボックスがヴィレンドの腕をとって、袖をまくしあげた。

「待つて、なにをするの？ 予防薬、って飲むんじゃ」

「薬は全部飲みものなんか、この街じゃあ」

ボックスはヴィレンドの腕を掴んだ手を放して、軽い溜息をついた。

「種痘つつーのは天然痘ウイルスそのものを弱毒化して、人の腕にうつんだ。つまり、先にわざと天然痘に感染させるんだ」

「そんなことをしたら、大変なことになるよ！」

男がボックスの持つ鉄の棒をみて、ふらふらと後ろにさがった。

男の言葉は、ヴィレンドの心中そのものだった。感染させるなど、死んでくれと言っているようなものではないか。

「だから、弱毒化してあるんだ。感染させたウイルスは、ひと月ほどで完治する。一度感知した病原体は、その人の身体の中で抗体ができて、二度はかからなくなる」

「どういうこと？ ちょ、こっち向けないで！」

「つまりなあ、先にちよちよいと感染させて、治しちまうと。もう天然痘にはかからないんだよ」

「本当なのか？ 実際に試したことは？」

「ある。俺がまだ法王につかえてたころ、一度天然痘が流行った。

そのとき、俺自身にも種痘を打った。ヴィレンド、この種痘の作り方を教えたのは、法王自身だ」

ヴィレンドは、ボックスの顔を見返した。いつもの笑みは浮かべていない、真面目な表情のボックスと目が合う。

法王は、絶対的な存在。しかし、その姿は一度として、見たことがない。

法王に仕える神の子の中でも、ほんの数人しか会うことが許されないという、雲の上の存在だ。

「法王に、会ったのか」

「ああ。全身に布かぶってたから、顔は見えなかったがなあ。種痘の存在を俺ら医者に教えたのは、間違いなく法王だ。その当時の俺はまだ子どもだったから、法王の偉大さに感激したものさ」

法王は、神に等しい。決して朽ちぬ身体をもち、豊富な知識と甚大な力で世界を守る存在である。

その法王が、種痘をワクチンとして広めたというのなら、間違いはないのかもしれない。

「わかった。それを打とう」

「君！ 天然痘にかかっているかどうかわからないじゃないか。感染してないのに、わざわざワクチンなんか摂取しても無駄になるだろう？」

「大丈夫だ、ボックスが言うのだから、間違いはない……と思う」
「思う、っってお前なあ」

ボックスが、声をたてて笑った。

つられて、ヴィレンドも笑った。さきほどボックスに掴まれた方の腕を差し出し、自分で袖が下がってこないように抑える。

「正氣かい？ ああ、もう。見てられないっ」
「じゃあ、ちくつてするぞー」

細い銀の棒の先が、尖っている。その先が、ヴィレンドの腕に触れた。

ちく、と肌を刺す痛みと共に、僅かに血がにじむ。針の先が、皮膚の中でわずかに動く。

「はい、終わりー。ここ、針が触れたところ、絶対に触んなよ。いいな？」

「ああ、わかった。これで終わりか？」

「そ。三日後くらいに、少し腫れてくるかもしれんし、熱が出るかもしれない。でも、そこから回復に向かう。大丈夫だ、安心しろ」

ボックスは、使った銀の針を布でくるみ、また箱の中に戻した。次にまた銀の針を取り出して、今度は自分の腕に刺した。

「ボックス？」

「俺も打つとかねえと。前に打ったのは、もう六十年以上前だ。ワクチンの寿命は、だいたい二十年ほどだそうだからな」

自分の腕に刺した銀の針を、ボックスはまた布にくるんで箱に戻した。

「どうやら、一本の針で打てるのは一人までのようだ。」

「これは、発症した患者には効かないのか？」

「いや、発症七日以内なら、効くことも多いらしい」

「ならば、さっき言っていた街の西側で発症したという者も治るんじゃないのか？」

ヴィレンドの言葉に、ボックスは苦い顔をした。

（まずいことを、言ってしまったのだろうか）

そう思ったのと、男がはっと顔をあげたのは、ほぼ同時だった。

「治るの？」

「お前、種痘を信じてねえんだろ」

「発症してからでも、治るのっ？」

男が、重ねてきいた。

ボックスがそんな男に対して、うるさいハエでもはらうように手をふる。

「んなもん、わかんねえよ。さっきも言ったけど、種痘が原因で命を落とす者もいる。誰が駄目で誰に効くのかなんて、俺も知らん」

「でも、助かるかもしれないんでしょ？」

「あー！ お前、信じてねえんだろっが」

「信じるよ！ 信じるから、だから、ポルビア先生とテッドを助けて」

ボックスが、ため息をついた。箱の中から銀の棒を一本取り出して、男に向かい合う。

「じゃ、腕だせ。助けて、ってことはそいつら隔離されてるんだろ？ だったらまず、自分の予防だ。ほら、言っとくが種痘は完全じゃねえからな」

ヴィレンドは、黙って男の様子を観察した。

（あれだけ騒いでいたのだから、腕を出すはずがないだろう）

ボックスも、意地悪だ。

だが、ヴィレンドの予想とは反対に、男は迷うことなく腕を差し出した。

驚くヴィレンドに、男は厳しい顔で言った。

「先生たちが治る可能性があるなら、僕はなんだってする」
「ほう、なかなか見込みあんじゃねえの」

銀の針が、男の腕に刺さった。軽く顔をしかめた男だったが、針が抜かれると何事もなかったように椅子へ座った。

「さっきも言ったが、触るんじゃねえぞ」

「わかったよ。熱も出るかもしれないんだよね」

「そうだ。つか、お前なんでここにいるんだ。さっきのあわて具合からすると、ピカラの知り合いか？」

「そう。ピカラを待ってるんだよ。テッドが高熱を出した。もう助からないかもしれないから、テッドから手紙を預かってきてるんだ」
「へえ、わざわざ橋渡しをねえ。それで、様子を見に隔離場所へ行つてたのか」

ボックスが銀の針を箱にしまった。箱のふたを閉じたしゅんかん、その手を止める。

ボックスは軽く目をみはり、口元に手をあてた。

「まで、そのテッドってヤツは二十二歳か」

「え、そうだけど。よく知って」

「まずい。ピカラのヤツ、そいつに会いにいったんじゃないか！」

ボックスは立ち上がると、部屋の中にある医療道具をかき集めた。突然の行動に、ヴィレンドは椅子に座ったまま、ただ啞然とした。

「ピカラが、テッドに会いに行つたの？　なんで急に？　ピカラは、隔離場所へは行つてないんだ。中の様子なんて、知ってるはずがない」

「俺が教えた。発症後十日経つた患者は、そろそろ二度目の高熱が出るって。軽率だった、言うんじゃないかった！」

ありつただけの医療道具をかき集めたボックスは、それらを目についた鞆につめた。

「お前ら、ここで休んどけよ。種痘接種後は安静にしてろ、いいな？」

「ボックス、どこへ行くつもりだ」

「俺は医者をやめた。もうこの手で誰かを殺すのは嫌なんだ。だがな、俺のせいでピカラが死ぬのは放っておけねえ。俺を命がけで助けた、バーチとフーシャに申し訳がたたん！」

ボックスは、隔離場所へ行くつもりだ。

ヴィレンドはあわてて立ち上がると、身の回りにある必要そうなものをかき集めた。

「待て、なら俺も行く」

「駄目だ、ここにいろ。もしお前らがきたら、俺は種痘を全部捨てる。作り方も教えねえ。いいな！」

「なぜだ、ボックス！」

「せめて、三日はここで大人しくしていてくれ。熱がでなけりゃ、来てもいい。お前もだ、名前は知らんが、ついてきたらお前の助け

たいやつらの治療はしない。いいな」

ボックスが、男を睨みつけた。

その壮絶な顔に、ヴィレンドはなににも言うことができなかった。

やがて、ボックスはドアを蹴破る勢いで、部屋を出て行った。

開けたドアから入ってきた風が、ぼつと音をたててロウソクの炎を消した。

（そういえば、まだボックスに出会って三日程度か）

もっと、長い間共にいたような気がした。フーシャからよく、彼の話をきいていたからかもしれない。

「僕、どうすればいいんだろう」

男が、ぼそりとつぶやいた。ボックスに気圧されたのか、椅子に座ったまま行こうかどうか迷っているようだ。

「ボックスがああ言ったのだから、三日は大人しくしていよう。そういえば、名はなんという？」

「僕は、パルスっていうんだけど。あ、今ロウソクつけるから」

（パルスだと？）

ヴィレンドは、パルスと名乗った男をみた。

パルスによく似た、男だと思っていた。まさか、名前まで同じなど、ありえるのだろうか。

しばらくして、パルスの手によって再びロウソクが灯された。

ヴィレンドはパルスに、「子どもの世界にいたパルスではないのか」とききたかったが、炎の揺らめく向こうにみえたパルスがあまりにも弱弱しくみえて、きくのをやめた。

彼は今、家族同然であつたポルビアとテッド、そしてピカラを失うかもしれない状況なのだ。

その夜は結局一睡もできず、押し寄せる睡魔に身を委ねたのは、朝日がのぼつたころだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3861m/>

子どもの世界

2010年10月9日21時12分発行